湖月抄　あふひ　九

内閣文庫
和書
類
八五四四
號
六〇
冊
三三
函
一一
架

和書
門
類
八五四四
號
一一六
函
一一
架
六〇
冊

内閣文庫
番號　和　8544
冊數　60　（15）
函號　203　31

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書
淺草文庫
明治十年購求

葵　巻の名哥をもて号す　はかなしや人のかざせるあふひゆゑ
神のゆるしのけふをまちける　源内侍　かざしける心ぞあだにおもほゆる
八十氏人になべてあふひを　源氏　源氏廿一歳より廿二歳の正月迄
の事あり花の宴乃巻は十九歳の三月とあり此巻のはじめは廿
九歳の四月より廿歳の年中の事みえず此巻に朱雀院乃
受禅冷泉院の立坊弘徽殿の大后斎宮斎院の卜定源氏
の任大将なとの事あるべし[illegible]花宴に[illegible]なし

世中かはりて　桐壺の帝位をさりて世[illegible]也　細内花宴に桐壺の位を朱雀へゆづり給ふ[illegible]花宴の年より[illegible]二年の[illegible]　紫の[illegible]巻に[illegible]　[illegible]花の宴[illegible]　細朱雀院の御代[illegible]源の文帝の御代[illegible]　桐壺は在位の時[illegible]　源氏の[illegible]　細[illegible]頭職[illegible]大将[illegible]年三月廿七日任参議同四月三日兼左大将[illegible]

世中かはりて後よろづものうくおぼされ御身
のやむごとなさもそひてかろがろしき御しのびの
ありきもつつましうて。ここもかしこもおぼつかな
さのなげきをかさね給ふむくいにや。なほわれ
につれなき人の御心をつきせずのみおぼしな
げく。今はましてひまなう。ただ人のやうにてそひ
おはしますを。今后は心やましうおぼすにや。
うちにのみさぶらひ給へば。たちならぶ人なう心や
すげなり。をりふしにしたがひては。御あそびを
このましう。世のひびくばかりせさせ給ひつつ。今
の御ありさましもめでたし。ただ春宮をぞいと
恋しう思ひきこえ給ふ。御うしろみのなきを

捨られはつまじけれど 河我をやむ人にはなりぬれど ひかりや我も人のうれへをやりぬ 抄 ゆるしなくてや
よくおもはれは源へうらみのあり人あらくあるべきをむくひありや又源へ右大臣のはかなく思ふ
世ならずともさるかりけれの字無用
今入まして 細 御院后宮はやくれてはかりなきよそ人のやうに右大臣よりひかりーかまひなし
にて御ひまなけるときに猶同御なくうり御おもひたるは今はさしにきこえ
さる人のやうにそらひしかりーます ざうとくしも
いま后 細 弘徽殿之后にまうしたてまつるにうつりは右大臣と一所にまいりたまへとおもひしくて
内々の御こと御こしやうすく 花云 朱雀院即位の折に弘徽殿女御を皇太后と申し 抄 弘徽殿
右大臣女御の中宮にかはりのぼりてはそのひなきに中宮につりしと弘徽殿へこうしの御かれ八所にすゑ
うちさぶらふ人たちの 細 右大臣ハうちさぶらふ人もかくてすへもとを 師 弘徽殿八雲御中にけるありて
わざわふ人とせまりせねてんやまりきこえて ありはの御門のわたりせ
今のわたりうち後宮之 細 宰相とぞいへ
さて右大臣をとどまりけるに 花 次に泉院と申すやりめる事にて
姫でみてくうり立坊ハ受禅ぬの事ならべし 細 冷泉院立坊の事おほきとぞい
右大臣の大 細 此時斎院の大将
之斎院にて大将をりの例 ほ門の御んまく
河海に第みぐうり案花 うちうめくうりとおひまざりて大将の君はよう
他後光九月に大将には三位 川をさうしてつけ給もさうづらいをき物りし
中将宰相にかくるぞ後て大 しとかげらてやうしやりの六条の北息所のれ
将になさせ給ふ御宰相の大 ちらしの斎坊の姫宮歌交よねまひかしうなべ
ねと御心うちまうるいと目出度 のはうくうだん人もいとしうのりしなすうにけるかな
いまめかしとなりし 私交陵二
条関白御通ふの事
花源氏位大将の事さま

佐てみえうり右業ふ巻よ氏神一かうまりて大将兼給しき
えろ所ざうしつけみふもりさりうくて 孟 陰の御うりと北門の御へ悦しうとのに綫家へたを
まうゆくせあらししうれしくやひまつる 些云 源のふ事く 細 右大臣ハうとうへうきうしとゆかり
さとかり 抄 此記めすしくて
まうしや御六条の 細 御息所の御ふ也及しさうかりくすまちまと
斎坊 花 主文坊と辞退ありし人と斎坊とさ之にて一条たしのごとし坊とハ斎文と辞とそゑく 細下
仰 坊のふるは早世しまるとも斎坊とりしし文彦太子たちのごとし斎の主文坊の名く
ひめきや 細 姉ぬ中文とりかり斎坊御に女去条御息所の御腹く
ふよよみ給りく八 細 秋好中宮之世のたしめよハ斎秋文らりゆる 若年 朱雀院の代始よ
下定しして秋文と定つ事て之年の秋野の宮に入まひ始年らぐりはくさきとみるべし 時
主ありて三年しめよ下あのへきく 仟 秋文の事ノ当仁天皇の皇女倭姫ノ命より始まれり
此物語ハ延喜の式に准らへし 延喜式第五 斎宮九 天皇即位者 定伊勢太神宮ノ斎宮三ツ
簡内親王未嫁者卜定若無内親王者依世次簡諸王ノ女卜定云云 秋宮のたちり中こ
河海ふの詠給二表 細 御息所こ源の思ふ見えまかく 抄 御息所の心くさ記の詞にうくをり
大将の北給さんも こしかたの事なさのかしおりしりハ北息所をとくも涼かさせかり中みさうり
てさりやとえれまし 細 源の北 抄 秋好の中宮へみやすかくされきれあわりま候のうきろめくさまにこしつけ
んとそらさつりれて此歌をは 伊勢へ てうりやきえれまし とうねてよりおもしまり
思りてくさりやきみさうしと
北わもしく
懐おかうろるす 抄 桐とよとも 懐みとりうつとかんとまるしめて右京及
くしめて懐に出くり仟くう 右訓あろき斎坊ハ桐壺の御事ハ 細 又御門源に
まナとハ源の北息所へ詠き いと庵んごしろすく逝かりとすさめりしのひしりのと
のりしと定名しくし 北息所とく

うつくしうけても　御息所に
つまでも秋またつかでも家
のおもうよあらハ四寺給とく
すきれぞ　わざくしき
おきのうく
此たしこあしられハ
院の御挨拶ようしね
ゆへら
ノのおもしろうきしき
細 御門の源よと人給秋む
葵上よ御息所の物の言よ
御給し事よ叶てり　孟月
をしらぬ人の物わけなきを
花　葵上をも海ありし之　細 若
葵の此くすをかわりけるを
咲去てかし
又く院みよ　此門の教訓よ
うり源のいろく心もんく
此御息所のきしく

ろぐしうそやんべしろさ西よりてたゝえもなか
がいとかしさてし、秋霧どもこれをこゝろ乃
つゝよなんぬ四人へいいけるよつけてを、どろかな
らさしんくとよりしめ、心のもとさひまゆうをて、
くちをさわざもろて、けし世のりくさ地ひ也ぐ
さこしとかりかたし、御有さまあしるれハウガ清
こころみをけみしてもひたちうれへりしこまりて
まうひすみ人のさあそらでうまさこしれく、
いゝ里どもとかなでつうゆあそあしてかの女のうくし、
みぬひそとのしみ西ハそろまでつらぬ心の地風
けるさ後そうしめつけるてう人附と地そうし
きれたぐしてまうてそのぬ、又く院すもこ

つく安んとうてく
御出門の御よつくそてつめくや
ひたしすくハ地からとく
さざわられて　細　落てよ
院みもくられする志ろつゝ
よううするうし、未也ひま
よしなり
女をみけするさ此年　細 木息
所ハ源よ八の兄と、此時御息所
六九ゆうく、し源八此一也此頃
の年御息所卅ゆてハま
悩をとし給とありゝらいて
年のよしさうおよ御息所の
うさうハ勝劣の人の之　晉
しれよ志さひさら
細 源の知をたお御息所の御名
うこすよ御分らよこしつあそての
くうつゞを御息所ハそうゝる
しくせ給へ　孟晴曰
かるしをあらぬ　そのあ
てとそ細にとよろあてこれも
うつこと後きく給ふも
かた六御息所の上と御人ゝ吹のあ
てふ此ふみさ御給とく

あしめのさまへむろうよ人のたいんとわうらみを
そさが海しうつとおしきよふくやむごとなく、
心ぐるしきをうみはもひきくしまへかすぐ
わくわれていわぐいりてみしきくまらず、女なと
みげなきれ年の程をもいりしうおもほして
心とけ給ぬるも色なれいそれはそくさうひ
こうさ西よりくあしして、院よきうつめしいれ、
世中の人もきちぬかくなりまうる後ふから
しもあくぬれこゝろの程ど後ひうしう地かり
かげきそうちうこう後ろて給ひをとめさぶ風
の姫君ハいろゝく人ハけとしあううぢかきがかく
うるさこさ西なうしれろうなどしも地さく

わきうかの姫君　細　桃園式部卿乃
斎ノの女也つかよ源の懸想して
まさりもて姫君のかし人
にて御息所のことくまでハと定を
めてし桂の君ハ帝木の巻ニ人
のうへにらのうしく〳〵〳〵の源氏
一ツの内伏貞女ハ槿姫君と定
評なし

これとて人にふつく　花源よ姫あ
ひきさまねせさりくるよりし
さかくハおへねれりてあしと
人よハ詩なりくし源の御心をし
あまりつゝまね　細　葵上の御方
よハあらのあすとも源の御返く
つて元姫かくる知よまのを思へ
し給ふかな

葵上をさすしと八思えれど
細　御息所への心をえある義
なり面白き云義なり
孟　御息所へ思ふなり

あし。さりとて人にくゝはしたなくはもてなし給
はぬ御気色を、君も猶ことなりとおぼしわたる。
大殿には、かくのみさだめなき御心を心
づきなしとおぼせど、あまりつゝまぬ御け
しきのいふかひなければにやあらん、ふかうもえ怨
じきこえ給はず。心ぐるしきさまの御心ち
になやみ給ひて、物心ぼそげにおぼいたり。
めづらしくあはれとおもひきこえ給ふ。たれも
たれもうれしき物から、ゆゝしうおぼして、さまざまの
御つゝしみせさせたてまつり給ふ。かやうなる
ほど、いとゞ御心のいとまなくて、おぼしおこたる
とはなけれど、とだえおほかるべし。その

斎院　河　嵯峨天皇弘仁元
年置斎院司以皇女有智
内親王母交野女王為斎王
延喜神事式云凡天皇即
位定賀茂大神斎王仍簡
内親王未嫁者卜定
花今案斎院御禊事見下
定あれそ、まづ河のの事を除て
みそぎされるりあさてもくに初
斎院へ入のふ初斎院とハ大内
の大膳職或左近府なとを
點して其れより三年潔
斎のうち
さきにいう
御服花宴まれ叢ぞのあす
おかし人からし桃よ夜の
御服まそしけりのあ
とちらしとよぬおふと　細　斎院
よ立給ひ神よりけしとみつき
てんつきあふしとく　孟　潔斎
まて人あと新まふあれに別
よ立給ふ人ことかよ立給く
まつりの引く　孟　さこまれ
るまりの上花るすとそへあふ

ころ斎院もおりゐ給ひて后ばらの女三
の宮ゐ給ひぬ。みかど后いとことにおもひ
きこえ給へる宮なれば、すぢことになり給
ふをいとくるしうおぼしたれど、こと宮たちの
さるべきおはせず。儀式などつねの神わざなれど、
いかめしうのゝしる。まつりのほどかぎりある
おほやけごとにそふこと多く、見所こよなし。
人からと見えたり。御禊の日、上達部など
かずさだまりてつかうまつり給ふわざなれ
ど、おぼえことにかたちあるかぎり、下がさねの
色、うへのはかまのもん、馬くらまでみなとゝのへ
たり。とりわきたる宣旨にて大将の君も

人がらもとくらぬとハ何ゝにも人がら之 細 女人よりの事をいふ

ごけいの日 細 斎院と卜定して二度の御禊あり初めの御禊をば吉日をえらびて河の禊ありて宮中の便所に入給ふ其年の四月まで諸社祭の時へまいりて祭の時 紫野の野宮へ入給ふ

りの御所へ入給ふ是初斎院と云 上巳二月ハ野宮より 上ニ云二度の禊の後の勅使

ひき河原禊ハ四年の日也(?)斎院の仕へまつりての上たる河原の御所へ 賀茂祭之

ミそ御禊陪(?)へいり給ふべし初度の御禊の事ハ此物語にもみえず今此巻よりつかたハ野宮より入給ふ

ひとつの二度めのあくへと云り。是は御禊の事也。勅使参議一人供奉と二度禊の

大納言中納言こゝにかきてはべるを供奉ハ毎年の祭日に延喜式に二度の禊の勅役よ

ハ大納言中納言名一人参議二人四位五位名四人凡て十二人の勅役せられを数さまると也

源氏大将ハ参議二人の中なるべしこれを以てこれを云に此巻にいふハ二度の禊のたしかなる事をいふ也

きりの 細 人どもかたちある限と勅使ニ立られて

おほしこそよからぬを

下がさねのいろ 細 さま〴〵の色の日ハ皆染装束とて下襲表の袴を色々に染て用ゆ 花鳥

禊の日の勅使公卿ハ染装束を着ることは唐綾或ハ和綾を用ゆる事と作らるゝ

とりわきたるせんじにて 細 大将供奉例花鳥に見えたり 花 国史云貞観三年四月十二日丙辰賀茂

之斎内親王臨鴨水修禊是月便入紫野斎院勅大納言正三位兼行右近衛大将源朝臣

定監禊事云々斎院御禊大将供奉例也

物見車心づかひ 細 御禊と別にてとりはからひ 注 源氏の君中将の時なれば御へ

かうやへし

一条のおほち 細 斎院河原へ

へおはしまし通りける 此大路

大内裏の北の大路也 此大路によ

つて一條と名付られたる也 二丈

歟

〔人どもの〕とりわきたる

をつかうまつり給ふ かねてより物見車心つかひ

しきり一条のおほち所なくむくつけきま

でさはぎたり。所〳〵の御さじき 御桟敷 心々にし

そでのれおりこさも 細 御葵

此上ハおんおもしろくてや

うの御見物ニかゝるよ

まして懐姙ゆへなしもかけ

ざりしや

いでやおのがどち 今日の御

見ともつかするとおもひ

まうけそえんハこひしう

んとなし

おほよそ人々よ

かのけなれたる人を

いつとり

わかきよ人々へ

呼 車のさら所なき所に

立つり御供奉の人なと

を遣めてさるしから

しつくしたるしつらひ人のそでぐちさへいみじき 御袖口 細 御見物の袖口さへ

又御見物なりとく きものなり。大殿にはかやうの御ありきも 細 葵上也

をさ〳〵し給はぬに御心ちさへなやましければ 懐姙ゆへ也

おぼしかけざりけるを。わかき人々いでやおのがどち

ひきしのびて見侍らんこそはえなかるべけれ

おほよそ人だにけふの物見には大将殿をこそは 源氏也

あやしき山がつさへ見たてまつらんとすなれ

とほき国々よりめこをひきぐしつゝまうで 妻子

くなるを御らんぜぬはいとあまりも侍るかなと 本 かまはなき事とぞ

いふを大宮きこしめして御心ちもよろしきひま 細 葵上の母宮也

なりさぶらふ人々もさう〴〵しげなめりとて 孟 兵曲也 師 さびしげなりと也

にはかにめぐらしおほせ給ひて見給ふ日たけ

ひまもなうたちわたりたる
細 儀式なるかよ見物の人も居
定まりてなかりし
よそほしうひきつゞきて
抄 葵上の見物の車は事々
しくよそほしう八数も多くし
き車数なくあまたありて
見物の人は隙なくみちたるに
つゞく
よき女房車おほくて 和 葵上の
御供よりさき女房車おほくあれは
外の車のたちならぶる中
よき所を見さだめて其の
けさせて御供の車をたて
させたり 此中より御息
所の車も見えし 細 雑々
の人なきとは車ぞひの雑人
なきは御忍びてこれのり
あじろの 細 あじろのと
よしばめる 花 儀式は唐庇
檳榔庇毛車などみる檳榔
とうぞ 尼君半蔀網代

ゆきて。儀しきもわざとならぬさまにていで
給へり。ひまもなうたちわたりたるによ
そほしう。ひきつゞきてたちわづらふ。よき女
房車おほくて。ざう〵の人なきひまを思ひ
さだめて。みなさしのけさする中に。あじろの
すこしなれたるが。したすだれのさまなどよしば
めるに。いたうひき入て。ほのかなる袖ぐち。もの
すそ。かざみなど。物のいろいときよらにて。
ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車
ふたつあり。これはさらにさやうにさしのけ
などすべき御車にもあらずと。くちごはくて手
ふれさせず。いづかたにも。わかきものどもゑひすぎた

ちさはぎたるほどのことは。えしづめあへず。
おとな〵しき御前の人々は。かくななどいへど
えとゞめあへず。斎宮の御はゝ御息所。物おぼし
みだるゝなぐさめにもやと。しのびて出給へる
なりけり。つれなしづくれど。おのづから見しりぬ。さば
かりにては。さないはせそ。大将殿をぞがうけには
思ひきこゆらんなどいふを。その御方の人もまじれ
れば。いとおしと見ながら。ようゐせんもわづら
はしければ。しらずがほをつくる。つゐに御

これ大今となりて八天ちくね
へかと沢くらえ紙だりの史記乃
さ候ありくるし妙く
へさまひ　河　人給　後国口証
揉記有此名副車云々　人給
ハ乗騎也　花　お車とハ公方
より許されてをる人の乗也
也へ人給とるづくめく枕
葉子云ふもしなくくら首ら
うの前の御車　人ごまちひ引
てきむしかりくふつと此く
まくしむとあるんみの緒よ
御前とたちてかちよおりて
そぞの車どもみなのきよ
のけさせてとさ
ムやまし花といふことのそ
お車だにとやりのけられて物
もミへぬさ候くそれよりも
おしとやこし思ひまふらとそ
この御息所とそうていふく
きの車より床とねたきに
作く思ひまへとくうれあるの
あまたありへきこりめく
ちどうかくも　河　青ハ女房車

車どもたてつゞけつればひとだまひのおくにお
しやられて物もみえず心やましきをば
さる物にてかゝるやつれをそれとしられぬるが
いみじうねたき事かぎりなししぢなどもみなおし
られてすゞろなる車のどうにう
ちかけたれば又なう人わろくくやしう
きつらんと思ふにかひなし物もみでかへらんと
し給へどとほりいでんひまもなきにことなり
ぬといへばさすがにつらき人の御前わたり
のまたるゝも心よわしやさゝのくまにだに
あらねばにやつれなくすぎ給ふにつけても中
/\御心づくしなりげにつねよりもこのみ

細　出車之由雑車云々　細　御息所の事也　御息所の御車のさま也　細　牛引かけとある也　御息所の心　細　くやしき心　細　さや故院の心　御息所の心　答なり　中なり　御息所のさま　源氏の御さまを見んとおもふ也　源氏ハつれなき也　さ事也

みとし榻とてそのかたな紙也　弄一勘　女車よハ榻と身ふのおりくさらやとりんしあく相又うぬ渡く
まくつかりの車のどうよ　車のどうとハ轂とえ轂ハ車の輪とつゝしすく一従車の床と胴といふし
抱又車ハ牛とさらで榻よ轅とおりあてゝ車ゝ今御息所の車榻とうしおかれハ外のく
引まれ轂よれ息所の車の轅をおろしてとさらしく
きのかまおぶ文　細　引かけとをふまらん　河　きゝのかるべの家ぞ川に弱ろく　ゑゝしあり
紙かぶふかん　花　家をとするもしのんと之とよのかまよ　大おうねハつまゞすくこをき
なり下の御息所の家よまうけとのみつしい何のつまかきうてあり　哢　公方を引てその公は
まうと不のまでとんぞを組みしきもけれとれとかたとものやとゆひみて御覧
そ給くいはのかそふもうすく又やり給くてあつしや
おくれこゝろほくしたり　源氏の御前ごゝろとまろえてゝりてあつてしかるとて
あよつてけるも　前よる文てより抱又車ムつひしきりとあるをそあてゝかにとて
をさらてさてかめよ　細　源のそれとゝらりてめちじめすふさとあるく　由源の思人の車をさ
御供の人ゝこらりてまり
細源の供の人出葵上乃
御まへとえ札とけてをづ
御覧といはく御息所ハ口惜
く又給く
とまされるありさ候
由葵上の車の前と君臨
塾よむろとるんゝ御息
所いはく至全る世給へて

とゝのへたる車どものわれも/\とのりこぼ
れたる下すだれのすきまどもゝさらぬ
かほなれどほゝゑみつゝしりめにとゞめ給ふ
もあり大殿のはしるければまめだちて
わたり給ふ御ともの人々うちかしこまり心ばへ
ありつゝわたるをおしけたれたるありさまこよ

女房の出車のやう也　源氏のさまやうの事也　細　葵上之由葵の車之　源の人　御息所の心之葵の人ゞをされたる也

みけとのゝ 細 中将の中将
世今日の参の縁之 時 もとを
而の源氏とハ而の人あ人九
源氏ハさても猶さることとも
至秋名院為此説すこともある
人のあはたえんの前とふよ
うちて前のさくれ兼まだ
よおゝねえと云詞のもの思へ
のとあやかれ 花 めものゝを
ろうてきこりの文とてらやう
なり〳〵後おさ集佐形行
如案ちゝ締てみ合とさして
とめもおくみてそれさハ源氏
ひめもあやハあやなきか之ね
紫のちりとゝきをうをふう
ろうへし
大将のうらの左馬頭よ 河 うらの
左馬頭ハうらま其目つかさと
云ふく 花 此又才而雅意
之佐拠子も左ーくまそれまづ
うりの左馬頭とらゝハ一負とも
うたくさく 上儀の お監ね
曹府生と一人つくりその
みつりをくらしてつくてことを

なうぬがたる
(中将) くげゝのとえてらしけのつまでなりのぼりて
き猶ぞいとくちをしくと思ふ人の (心とゞめて)
うちとけしこまをまとれどめとわやかなるけきを
てうらのいかにしてうらへとおぼへる人
くべきとおぼさるゝかくよつけてきさうぞく人
のおかしき人とあつうとのへうさりしと云ふる
なりあとほど進みあいこともなり伐ひさくこ
ろのれひとりかはなどさるれあれ左馬頭
うりのすいどんよ蔵とのそうれどめもさう
ハつねのことふとおとろへめ行幸なと
のめりけるかさんがやくかはいなをの蔵人あてゝ

ゆうく徽よゝつて左馬頭と給ハりぞうのおりて出仕のさひはよのつゐりしかゞらうそかけは路て
一人ついしまてもそとうりの左馬頭とらふく假令納言の大将以下ハ左六ハ左右ハ大の番長一人を乗又人
亡ぶ云人の左馬頭とゆうされてめりくもろ之兵上よ縁賀又中らのはハお監ね曹府生と又一人行く
具さらと一負ともりの左馬頭ともつらくこつましもみる陛下のとらしくも其人のそうらと六献
上の兵人のお監とりハされと一負よ具さうこと八倒らうさことゝや又の行幸の時ハ左右近衛将
監ね曹左率陣よ伏をさうよりてまさうの一負よりつらしとれとゝれそゆをねるや
源氏ろね〳〵とかりへさわよめ氏年さうへし 河 口傳云 以前儀の寓言之術とらうへし
此一派の相ふねりてきこしや別よ於ろらもとへし 往岡御説 師 殿上の云ふりと八六位蔵人をそ近来の将
監と兼官の人也 細 花鳥にも源氏才一の雑乎之らく春花乗うよもろゝうてまう事と加へるく六本らへし
流や殿上の兵人をうらてもまてうまれなりうく
石近蔵人のそう 細 御郷
の衆のをえ才之 師 伴ち妙う
みせ以よ次ナへ源のさうちら
へ寸行ナしは作りをしく〳〵
さくめこゝをいえ人 お女のとの
せうの其の此左馬頭とらゝ
やゝ外出来うくきら場地
下なり
木美よとかりハウめハ 河 論語
日君子之徳風小人之徳ハ
草尚之風必偃 師云 尚ハ
作加上 也
つかさらそく 孟 俊成卿女説ニ
云市女笠とうきとぞね暴

つかさまでのぼりぬるほどのいみじくたかきことゝ
をがさまぢゆくそこの人世よりて参られ
すへる海木単をなかにぬハあるましげなり
つぶさきくなりとふをぐくこまで女づくるのい
やゝしくぬゝや又かまたゐの世をそひとさけう
なをもとうれまろひけりいはゝ人よかうふさまれい
しびかなりやおるふくとあるみえふる

すゐ女をつかさどるくといふところ 河曰 又孟津につかね装束ハ衣つけたらんへと入たる太府経之
ちく 師 衣つけたるとハおり色ある小袖のすへのあはれつまとれてせんにちらし 河 源お
松葉紙にこゝろしはのつけさうくさう人のいそきたる
女ハうのいやしうらわやみわまるの 菊にあやしきやまひ川さんにまうん こもれハまき
国ちり寺みをわきうしてと云る貴庵也 細 老女なれのえ細に知るなるハよのつねハみくさやなんと会日ハことゝりてと見ゆ
例ハわみつらに 師 源とらんと思て出つられハおとしなつうしく
おとこさらめしく 細 是もつれ装束のかたりく
孟 つれたるすへにみとこめ
入るなり
てとほうりて 細 花もる人
宋朝に司馬相如と云し者
の洛中に入し時ハ是とみる
源のまと額に加ふとるす
通鑑とふ出にみえたり
心ハ是思おもやまりて書る
し給なくへし是ハ司る相
ふなりへし 司る温公なる
世相如ハ漢の代乃人ハ温公の
事とかの字は誤字なり
通鑑も宋朝通鑑也
司馬光 趙開ニ衛士 以筆ヲ加フ
額ニ日此ハ司馬相公也

ことわりにくちうちひそみつへてみそこゑ（孟 口とひそみて老人の歯のぬけたる形也）
ろあやしの柚しもとし手とつりてひさこハま（孟 手をあはせて拝む形也）
て川くらそまうりわするゝ色ゆかしけり
なりし河のおまへどものかげのすがむさ御（細 身称を忘まて源どこにすう之）
ろふてそゝきさうえしらなむもこの給（細 源の心なるもわころまし也）
きゝもとりやうのしるめかしさくへ公の（簑領の中みもふうてらふろ之）
はくしう車とりよのりさ御こしとさうしび（孟 さ御くのゝ）
しわぎさうしたりすんおりしきやうくのと抽

河ニ大鏡に云一条院去日抄筆に御興にて大まうひのゝせさまふゝ日会の民百代まゝく神
佛のやうり散よ手と会らくゆくミなりくろく
まりてそうして 源のさい
きあふまうさん人々公が
さうはうとまりて源のくり
ふし恐うよいのふかよのわ
さりハうやうよ及なきき源
のさ御とさそてわう身の粗ま
らぬと思ひさらわざきうく
き人多りうにとて 細 源と
神ないかくとそ
いさこりての給て紅葉賀に
弘徽殿の詞ハそわとえを（？）あ
ふまうりの給公お給まつ
としこらきこくわさりは 味
檀の姫君の名本に源氏
の年此誌に中て給る姫
文のれ公とまりなりけ見る
源氏のめでたさハ少うしも
いかそくまそて又く給と合
てうめなさうん人なりとも
くねん此なりよいなりひき
もを入つき事なりをまり
て源氏にかとりて知えされ

なりせばおりしてありしこまたらしのびてら
しひ給わるでハ人をれもとくるをすえぬなけしさまさ（細 桃園式部卿姫君の文也之）
ふちしもかくれるくちふ式アつまさへきまそへてそこ給（源の文を桃園式のみや源の叔父之）
をりしばゆきさいまでけひゆく人のこゝろ
御神などいぬもころわすへとゆし去く旅
しらぬ姫君ハ年ごろまそうて給けれんこ（細 檀の姫君之）（源の檀の姫君の事也）
へのせ人にわぬをたのゑすんおとくされおり。
ましてうつこともいりくとけいたまうりまゐりいたい（名のよう仍とそ落し言源その心し）
ちくてえん世そハ物がしいるんにわのきさへさ（孟 檀の姫君のま契る也）
ハきてのかさすでめぞゆかしおつちゆかりの日（源と参らく）（孟 寄日之 細 西日之）（細 源の姿人の心之）
ハ大殿中は相を給ぞんたるねの君ゆのゝ車の本（細 葵上之）

とけかくと八思ひわぬる
権の貞女なるしるし 細孟
なおもふ人よりもよおもひけるを
細 葵上このみ人めう
きらひて御やすむ所まし
まさく見れとも御息所の
あまりへんひがゝくて思ひ
しれまさるとさそまんへく
と思ひてみやうのことも身
ゆかしく 哢 左大臣殿の家
風をのこまつり
河かくいましも 葵ハさや
うまは息所をれしく所やう
まぜんと八思ふまじきれと
日比のそうの中よいかさまの
ハそみのとも志りかぬを
そのけふよおもひて次ぐの
所ようしぬ人でのもよう
わらんとく
斎宮のまさりよのよまよ
細 ト定わく〳〵斎宮のは
くさま入給へきをさきつまう
らそで未の六条京極
の家よおわしますとそ 拜同

あくそひをさめの人きかれハ〳〵
おしうしと思ほしく思ひしかりけるを
おそれ人の御みよなさけをされ給ぐ
志き事つさまゆる事きのよ身りうかさま
思ほしけれどかゝうなりしひんなさけうハ
よべきぬをも思ほしつゝぬをだけとそて
志つびてつきぐくよく〳〵ぬぬゝのとさ世くろ
おるんへし斎息所ハ今をせのいとえげりくよ
しわらてかほとりうのるゝいへかほしうむ
じよきんとうと思ひうてまてそまつりそれ
斎宮のまさりよの家よをしまセハうつきの
はすうまこうけてんやとくもえめん

河 慍 孝子経
孫流息所へ御哥

花延喜式云定伊勢太神宮之斎王仍簡内親王未嫁者読卜遣勅使於彼家告宗事由神祇祐以上一人率僚下随勅使共向卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外門
今案秋好中宮去年卜定ありて未だ宮へ入給はでかのおもしろくて神宮
さきふとえし榊のちぐうりとハ志ると思く
榊のちぐうりに 細 榊ハとそ附面うえ
久山の所編りり神の御木とて榊の字八月本の作り字く
とうりとは 河 榊八日本紀よ真坂樹とも書り天の香
源のくまれ息所のゝと案
しそたり
るまやうく〳〵てとう
細 只今附面ときをとそり
源の心く 師 葵もかし息条
ときり
まどいりさまへ
紫の上と同車して宮へに
かんよの事く 孫相分り

心給つゝとしころは思ほしなれてそ
やりくさろまそはくしりてかつをうりし
ひしちつむやられまふぐく二条院よるもで
まかりしてまうりさそよいぞ給ひしのさいまれ
さりまそて権定よ車のとし思ほしをてうり女房い
でらりやとの給そ御息のいとえくけりげよ花
くろひさそて思はとも紙ひらかさろさそそま
つり給ぐさはいざこすまへりうりよみえんへうて
てれぐしのつひうりもえてうくうまさあうをくぬ

細 源之
孟 紫上之
源のこ
孟 紫の給ふへ方と
紫の才風童
よ源の思ひもれのうて

ひさしうそうじ給へざめり さめりと
とく鬢そぎ給はんとの事を吉日へきとの
ひくよなんしとく
こよみのはかせと　暦博士
細　推古天皇十二年甲子正月
戊午朔始用暦ヲ
まづ女房いでねとて　すいやとののひ　仰事ま
まづ女房いでねとて女房たちは童のすがた
をかしげなるを見給はんとて　おほせられそ
紫の上の女房にらとめしおかれ
しておはしますと此源氏もそ
う給ふ　細　今日は源も女車
みそかにおはしますと
うきもんのうへのはかま　細　童
女のとりつくろひたる衣をそうし也
袴をよみてうり　河　浮文綾綾
のうへはかまのそうし綾也
表の袴にはうへはかまとて
花　西宮記云女親王ハ対面ノ時ハ總
角ヲ着シ汗衫半臂下襲
表袴玉帯等又斎宮斎
院童女着總角青色麹塵
汗衫半臂下裏表袴白キ

なぞすゑひそ。ひさしうそぎ給はざめりと宣ふ。
けふは日よろしかりなんとて、こよみのはかせめして、
時とはせなどし給ふほどに、まづ女房いで
ねとて、わらはのすがたどものをかしげなるを御
らんず。いとらうたげなるかみどものすそ、はなやか
に　紫うへ先ヨリ此髪そぎあるべし　そぎわたして、うきもんのうへの
はかまにかゝれるほど、けざやかにみゆ。君の御ぐし
は　細　紫上と源のそぎ給ふ　われそがんとて、うたて所せうもあるかな。
いかにおひやらんとすらんと、そぎわづらひ給ふ。
いと長き人も　ひたいがみはすこしみじかうぞあめるを、
むげにおくれたるすぢのなきや、あまりなさけ
なからんとて、そぎはてゝ、ちひろといはひきこえ
たまふを、少納言あはれにかたじけなしとみたてまつる。

柳帯　今案童女晴時ハ
袴ノ上ニ表袴をさる　文
幾ニ霰之世の事ニハ表袴
不着云々
ちひろといはひ　細　祝言之河海の
深さも何りつくし　何つくさん
の奥底まで海松を見給はん
花　ちひろ十二髪のひろく
おほすさまとつくりつけたる
やくにたゝぬ盃髪そぎの調
みるの中に海松と一よにとら
まちとおり　碁盤　嶋海
松　青目の石二重之也　花
を御髪にそへてそうする
ちひろとも　花　源の君に尋
と祝ひの心に付て定なき
心をみちひの塩によそへて
の海も定なきこと浅り
細　みちひくしほ　八源のこゝろさ
あやなきさとりそ　浩うたる
くせる心ひとつに是に　河　孟子
ひろまさりのおもく　細　一条大路
馬場ハ一条西洞院大宮馬場
ハ一条大宮也　花　馬場殿ハ北也

千尋　髪の長くれと祝ひ御くしを　少納言　ちひろ
千尋ともいかでかしらん　さだめなく
源氏言　みちひるしほの
のどけからぬにと、ものにかきつけて
紫上句　おはするさま、らう〳〵じきものから、わかうをかしきを、
めでたしとおぼす。けふも所もなくたちにけ
り。源氏心く　むまば　御殿
のほどにたてわづらひて、細　上達部の車の多きゆへ
かんだちめの車どもおほくて、ものさはがし
げなるわたりかなと、やすらひ給ふに、
よろしき女車の、いたうのりこぼれたるより、扇をさし

どやとて物見の所屋とて
左右の馬場より五月の競
射の時中少将の着所なり
別て賀茂の祭又内の時も
此陣あて一条と東へとを
見る家の在所の山殿の類
とあるなと
所さりきこえんと 孟 源内侍
か所をさりてまいらせんとなく
いかなるすきものならんと
源氏の車の中なれば源はみえ
内侍としるまぬく
ものしや 細 葵ハ逢ひを
言ひかけたり神のゆるしの
と祭ると八その葵の祭をと
なぞ神へまうるを人々同車して
見物ふれのひかきりたくし 晴日
ふ扇の内には 細 引哥あるべし
心ハ我身に人へきならんとし
孟 引哥なくても心ハおなじ志めの
内と八今の祭にそへて
心ハ神のゆるしを待えて源を
人のものにさるゝ源氏を
せ八ことにひあさきとえ給ひや

で人をまねきよせてこゝにやはたゝせ給
はぬ所さりきこえんときこえたりいかなるすき
ものならんとおぼされて所もげによき 源の車をいふ
わたりなればひきよせさせ給ていかでえ給
へる所ぞとねたさになんとのたまへば 細 源の在所をいふ よし 内侍
ある扇のつまを折て 晩 扇の端とれ
はかなしや人のかざせるあふひゆへ 内侍哥 神乃しるしの
けふを待ける志めのうちにはとある手を 人の同車したるをいふ 細孟日
そこをあへて とおぼしいづればかの源内侍なりけりあ 孟 逢日
さましうふりがたくもいまめくかなとにくさには 源氏詞
したなう 孟 雑舊 をけるくなもあさましと思ひて
源 かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人は

花 注連のかといふうるあれハ注連の内もうへし 師 神のゆるしを待えても志め内には人のものとならん
かざしける 河 八十氏人とは八人の氏姓のものをさすなりあまたの八十よりうちの人からん 細 源の一念か
さしくをみしれとて八十氏人とは多くの人にあふひをかざすものをうけて 祭るのなるもあふひを
このあふひをいとしんしき日とへりみえたりその時はわか古今物の名に葵とあふ日の事を
とりてくはあれど葵とりよこたはく後内葵とし あふはの物の名にうつくゝ曲たてまえ
花 後撰第四賀茂の祭の日物見侍りける女の車につかはしける 人のあふひを八十氏人の
てそのあふひをかざしてかくれてもいかなるみあれこの人のあふひてふかき八十
せし 師 大事根源云神の告ありて人々葵を挿そのゆへをそふるなり
らやしむを 孟 あふひは名にたつ
あふひとおもつらありてゐ云
まハ不逢とも云 師 人のあふ
也源内侍か事 人のあふ
ひこのあかずして八十氏人
あふひは草の名にとられ
八年といふも人のあふとも
ぶれとぞ 細 紫花物語二
路の宮か朝式部とひし
車ふかく祭見る事ぶが方
の扇にかくしたる紙の物
ほど付ける 紫 今案 葦乃
扉をハあふぐひかし
それハ車の中にて帷
とくる所で見る
びのかあるる 細 是八

なべてあふひを 女はつらしと思ひきこえけり 細 源の詞の折に
くやしくもかざしけるかな名のみして人 細 源のうくとの給へるに
だのめなる草葉ばかりをときこゆ 人とあひ 紫と源と同車之
のりてすだれをだにあげ給はぬを心やまし 紫を詫ぶ
う思ふ人おほかり 一日の御ありさまのう
るはしかりしに今日うちみだれてありき給 紫を源の詞之
ふかし誰ならんのりならぶ人けしうはあらじ 源と同車の事をいふ
はやとおしはかりきこゆ いどましからぬかざ 助さ之昔也 いとまふかくきこえる

世界の人見て源内侍よハ批す 盃内鉄目の源の此抄宮ゝ出抄ゝせしよそ人打乱て補ち人給之
ひぢしらしぬ 細 源のふく お 三光院内侍抄りしろうしぬ人と弄しみつうふと出わらそく
うごしわくもひろす 源内侍ハ人のうごせう葵としよみ源氏ハうごしあらんぞあてまるど
孫ろうしあらそひきうるとを源の出わとらく
こうくしくゆわせと
盃典よ出わとらく
ふくうよれとあうしぬ今さ
宗祇云不審出出 源内侍ゞご
らく面つきさ人すうしぬ
別の女車よ源氏より奇
などうり見へと業の上
と同車ならよけくまれ
て引けさり給の人ゝを
ぬらしく 坪 源内侍、出をと
かくさ人ゝせざるゝね人も
そことあひのうまゝる人よ
そじうてとなとも見いつ
ゆうかり盃日御命ひのう
きるよてすれてとハ帯よ
住ちらんのうちふ人とも
うもおもしとれかうゝき
ゑゝゝよあひ悪しで
まの人ゝもとも人ゑうく人
源の男をうとへしゆへまれ

こゝ人ハ又まゝ出して言をと読うひさゝうけし
源内侍のやうよ強面すしぬ人とよむ之

しあらそひかなとさう〳〵しく思せどかや
うにいとおもなからぬ人ハあひのり
給へるにつゝまれてはかなき御いらへも心
やすくきこえんもまばゆしかし 御息所はも
のをおぼしみだるゝ事年比よりもおほく
そひにけり つらきかたにおもひはて給へど
今はとてふりはなれくだり給ひなんはいと心ぼそ
かりぬべく世の人ぎゝも人わらへにならんと
おぼすさりとてたちとまるべくおぼしな
るにはかくこよなきさまにおもひくだ

息所のうりきふと人やいて
人とらく
さひそうすんべかめり 細 河海ハ
男ひとりてとも之悠うふそ
もしれらく
つりするあまの 細 十より寺物かり
引哥之伊勢へ下向はうすら
一を定めゝ給うしく
伊勢の海よ釣する海士の
うけうれやんひろを定
めよのつうけハ釣汁の紀も
放うずとつ高そ汁の流も
つそとぐ魚の立ひやまくて
盃内息示の伊勢へ下らや忘
手まし心楽給ふよ給
もう女息のうゝゝあれやと
かきろうさうあうそゆり
うんひろ川を心さく高
ならくは給もうさうら
やうとすみもまくの
ことあのやうたうへしみ下の
細 ふまさめゝとしうゆんと
ありみちよ一その奇にて
まう卯くし

すべかめるもやすからずつりするあまの
うけなれやとおきふしおぼしわづらふけにや
御心地もうきたるやうにおぼされてな
やましうし給ふ 大将殿にはくだり給はん事
をもてはなれてあるまじき事などもさ
またげきこえ給はずかずならぬ身を見まう
く思すてんもことわりなれど今は
猶いふかひなきにても御らんじはてんや
あさからぬにはあらんときこえかゝづらひ
給へばさだめかね給へる御心もやなぐさむ
と立いで給へりし御禊河のあらかり
しせにいとゞよろづいとうく思しいれ

難すゝぬ身をとかくまよふく
いでもしらすましくまよふく
みちさに 花 車あらそひの日のさまく
ハゆかしからぬく万条よ
さいそぐやうしくかりて
細 平生念比あそびて 源
もあハしとよおもててあ
とく 所 葵上とハいうして御
ひまいれまちらぬやうよくて
まれまさしかやうしとかきさ
きさはまくれしまへるもうかくぞ
物の青つくハ 細 河海抄
仙家窮鬼故謂人夢
魂与鬼通言我心中思憶
此十娘忽而夢見猶忽
此鬼作夢謂我故罵之曰
窮鬼也韓退之窮鬼ハ
みゆれまく 弄 生霊也云々
みゝし霊のまく 孟 日
きこゝのものけ
孟 うれくしきこえ 所 よろめ
にしみてみ条しつく
さとの表ハのさうしく
く方つくしの心方よ

弄 源氏よりさまとも一人御息所の御心し 師 御下向をさへ御さまたげ
の日のまく 孟 細河 大臣家の御事とハ葵の御事との註也
事方ときまり 師 此所従て御楽とことにしもの註也
ころ大殿にハ御もののけめきていみじうわづらひ
たまへバたれも〳〵おぼしなげくに御ありき
などびんなきころなれバ二条院にもときどきぞ
わたり給ふさはいへどやむごとなきかたはことに
思ひきこえ給へる人のめづらしきことさへ
そひたまへる御なやみなれバ心ぐるしう
おぼしなげきて御すほふやなにやなど我御方
にて多くおこなはせ給ふ物のけいきすだま
などいふもの多くいできてさま〴〵の名のり
する中に人にさらにうつらずたゞみづからの

葵上の御かたとさとられども
さきに葵の上とかやまうきて
るも多く難かへき是
ゆゝしきけんざ 孟 修験者也
物ろし同を見ていへあら
大将の君乃御かよひ所
源のかよひ所くと大
殿のさの方いつまよりくと
こあるかく
二条の君をとぶら
細 紫上ハくおぼされ候を 弄曰
人あまそく疑く
わるしよろこれうささ
よりましにうつりて候と云
表とそれをさしてうきき妻
文の心相をとひかやの人
をろしゝ也
きうれうめゝと 孟 人
葵の上れめとれ死より
しらその表又ありひ元
大臣殿よつくしまりのく
たちよのうでしたらるみ
ありての表ぞし

御身につとそひたるさまにてことにおどろ〳〵
しうわづらはしきこゆることもなけれど
又かたときはなるゝ折もなき物ひとつ
あり。いみじきげんざどもにもしたがはず。しう
ねきけしきおぼろけの物にあらずと見えたり。
大将の君の御かよひ所こゝかしこと
おぼしあつるにこの御息所二条の君などばかりこそは
をしなべてのさまにはおぼしたらざめれば
うらみの心もふかゝらめとさゝめきて物な
どとはせ給へどさしてきこえあつることもなし
ものゝけとてもわざとふかき御かたきと
きこゆるもなしすぎにける御めのとだつ人も

まてつゝと　（細）めの声れ
御くお葵の御さゆの声れ
志まさし

ひくかけたり　お葵ゆす
く御ひすつまつ声そ戦場
のさかうゝ、いよゝくれさ
命とく

しハゆやのれいろこまつけつてほさへろゝうもの
（葵の方やさきふれゝされなく）れバはめよいでこうろかなし。しめくしうしれ（細 宮の女のゝ盃ゑうとハきわく）
うぶれわゝつく。あしばぐゝと様ゝのこる
きのそかりくハひめとときこおげつ。いうきうさ
へざるげよまずみわざと。しほんべじ。つきよゆう小べさ（葵の命もあまうきさゝや）
（と出かとく）よりし。ゆうしうゐしくうゆわ。わくそゝわ流（左大臣殿大うおまうとく）（細 羽帝之）
ゆうもれはあゝ。ひ隙すくれ。いありのゝくとまで。
かりゝくをあさ夜のところがわけさこよつけて
と。いとざわしげたまの人の御身かいり。世中あまね（葵の乃ちゝと安ゐ出よ思之）
くわしさ、出ゆりとさて給ふとれ。息所ハさゞるうる（細 是まよつらぬいゝとうら所）
（わさく田ましく）うみやさうゝらし。比いゝてしろうしもあくさゞるまし。れい（葵と）
（御息所のし）どゝござろと。ちゝるめうりし所の車あくらそひ

の夜よいまかすても
細 人の恨ひ人さ所とよそう
尺ごろわしうさるゝ。いきつく
読門のくるよハ不肖の方
の恨わうさハ初ごろ御く屋
うの所とゆどうてべーしと
呼日
わるよわろうすゝで　細 御わす
たられよ他所ようちよ陰
ゆかて給し　盃 御息所の
わらまひるすうされハ様わす
よ仏法と禁ふゆられよ所
とめくく御修法とわさせ
給く
例すゝみよひ不　お御息所
のさゝへとうつて修法さ世
まふ所とそ　源のとるうえ
ふくわなら
うふすのことをものところね
やうよ御息所へのすかく
ゑうゝいさしも　葵のす
を源へのく、ふくも思ひね
とも秋生の末とそくろ
て今のかど　へ葵の方よ

（御息所し）よ人の御台乃うぢこゝよせうく代の殿よハさ夜（葵上の父左大臣方へ）
でも出かりしよくしきぶり。出りうれけりのをひの（細 御息所へ）
ゑざれよ。けにうろ私倒するびのくゆわうられぞ。
わるよわくりまそ。御修法をさとをせ給だ。ねどの（源氏し）
をうしまていゝるの御こうらよし。いてゆしくゆや（お中くと出まかく）
しまうてわうらりまつるまいさすゝしぬよひ所るれ
いゝうう世び給んゝうりかはうりをとこうりかすで。
つとゆりされぬべくゆかしつけまそ。かでやう給（細 葵くるしく）
人の御有様もうまいへゆの給ふいゝくへさし（細 源の頂之）
をおひつれ待しねど。ゆやらのハとくとく
しう。おひまどゝるゝくゞうつぐりし。こうよ。（細 白）
こうゆい代ゝすぐ人とそあんよりがを

のこゆかれとのまへ 細 見
をくさんしてうえしらま
てなとみうて仏故へし
かれにとおかりのいかさう
おもとの御をとうてわかん
ともし根かゝねやうみちゝは
息所へうしひかせて
なくさめかそれなんと
細 御息所のことく 師 常よき
かゝるまれぐてうなかひるん
いひてかわそうらめへくと
あり源の御かの深のれか
しきと御息所のとかくまう
うそ於源を好てうう給
いひ今ハ出かれ(?)とも 孟 蔓ノ
ひとゆかこよ於り
うり源の心をとせ給ふん終よ
とかくよ内くの御おとまち
きこえんもかつらしくうそ
と御息所の心そ

ゆかりのどかなる御こころなしつゝいつくられし
うらみ給ふこともありひとめなく給へつねにしけりとて
ろくうしけなり御思ひしさ給へてしたゆまかたりおほそ
れとうそてまつりしに給しちしけぬあさこのし
けよ出給に海のゆうしうのかなさかし
てうれんかへるとハゆかり人さらやむごとなき
さうてよひとつくも思ふもつひとのへきことしとい
てきまされハひかへりてゆかりてけり
給ふんとうよもそらこそつてあるんを
心のそつきめぐきこし中くりの物りこの物く
へうかうそうしまふれ文なうりて菩河
くさわか目くるとそうしとてうろと御なりつ

細 御息所の心也
源のへ
細 御息所から出給給之
細 葵上の懐姫のこと
わくてもうくもうさかくへく
細 源をわすへく
細 文の詞也 葵上のよろこひまふの
物語給へくまうからいしうさく
のを実すそと

神のやつし 細 御息所の内外
物語第一の平安くらし只新勢
くうかねそしく 花 ろうら泥
とひらとそよつきこう詞也
こそ神のゆるともいつり田
みもものやしきへ 早苗を
とりて泥の内よなりゆ河
神よ奉ひ所の我を
あく 師 りつくしいるくいてえ
詞也 孟 俗抄板流れの
うゝわこよまうか深川 神のをひ
ちそそふいつのたる ゆ
聞 て神ハひつのの深字
うへ冬ろうとこつくかのまん
心のうつのねひし 細 命しそ
涙をめてわか深れハ神のを
わからに心の井の心に深き
給つ 孟 源の内かさし乃
おうにふいくしいうかなりしと源
息所の出懐しわそく
いそをやもおうの世の 孟 云
引ひうかれ 師 いるろ
をやえそうれくもあの世の
ととそかく

かゝるのみはかなくつらしげよくも御やうどもえ
御息所へ御かたらしかきことく
知らきましてわんとあり給へこのとしつけと
とと給りのつら
神あるよ思給とり何をつりすかえしゆりる
ぎいのろ何かうさぞうきさ山の色にかなしとかつ
まそぞあるれはなハうてうらの人の中にと
うれきりしと。らと給ついうよやらのまあ
本世られ心をくてらもとゆくふよき何へきさ
よるくさぶそひさむへなきまちよくらしう
物かうれけうりいとらうわる山かれ
神乃こゝ想ってやつり。御て帰ぬ時ると
刑りなすの下

細 創成のことつけ
細 源もうゝきのこしつけ 思給
御息所へ 御息所
源氏の文也
細 いつことも知うへき人とし 師
眼 源の心中也 且感
源氏の文也
よろう
本よ御文の葉つうとわつとえ一首尾
句
うこと

袖のぬるゝや　細　山の井のあかすしてあつ渕よらせつらり　お　袖のぬるゝやいかにてありてるを
こぼりてしころべしさそぬらぬとは不徐源氏の御心のわかりぬ御人ならりと　いふ称号を延
許ますえの心へきら
あらまし物や　細　源の前之懸苔
の衣と色所　源氏の君の男
ともおつまては男こひさ
らの我ららそんはそおつさ
まは袖ぬらさとおつは流公の浅
きゆへ是れは袖ぬらりよはわ
らと身もぬらさとく源物物
語の懸苔の心よ井れし
おもかけ　細　大将の手ゝの書き
まゐりてもやへ宮こをさもかき
かし葵上のよう〳〵物ひきふ
れて一かきを多く宮ここしとも
ましねたく宮の御く物わる
ほうかねはそうりうき　なり
うかれもしく
故文化うの　細　河海よ大殿
の又大臣のうつし云々あやま
遊ろや花あるちの文大臣と
御息所の又君の死霊とを
こうくて配殺見年叔王宮

源氏方
わさみゆや人は世かりかりけるかさは男もそ
わ川わすしかうき我らさ世ほとりけめてやこのは
葵の奴大方をさゝいふつらん物をとゝ
うりさう川しはむしまぬなどもありし大殿よ
葵上に
いれものりけいてそうりていさしうきすしうひ
語らのはいうきもで海とらつ世とてのは霊ねつと
細
さうりやしもふうちもわらく
いふ物ありとんと源の語よつまて世海し川くれぞら
御息所の心
細
まをと示の歌をこし
孟　御息所の心中をとられあさし
男記川のうきかけきこうり海る人よ人をあ
しられなどもふ心をなさぬれど物をりかよあくら
なりたをりしぬいさりやわらんと世語しまく
ありこうとあらうちうかみ川よ文ひのて
ゆきまさし
もさ入公とそくくすへと違うて御見とを
きてうくやこうそうれどくうくれそとへ〳〵ぬ
御息所の

治の宮由息所より出仮す
栄花物語中十二にあり
晴　六条御息所の子は東宮の又御息
の又大臣の霊に給しらき
うひろく
おもひろの　お　わりの君とゝの
とおちりへくくんとおりれを
いでまねく
ひもふようしと　車の所あり
そむの遠仮私さまうれぞ
こなみのち川おもねく
まうしとうらちゆうろこまふ
細　さうよ奈のまりろと語所ゝ
やうの義をこう語りく姫君
は葵上にて　お　若まさりやと
ねかりしもさうかはうろう　ちもあり
とそうこれらの所く
行ゟ
ならくいうき　河　猛辛
孟　いうなしきを称く　細　いう
さいうめしもの文字違
云ゝ
力をせもそく　や　河　引きせよそく
いうやし此八人なるかりあすつ物
いへありくり　孟　細　曰
こ川しをてう　細河　云ゝ
釈公万

細白
東あ
とぞうるさゝとのおりまゝ人の世すひれちちあきら
らちひゝ
物まりくありとさ海けれしかへあそぎのちら
わすかりようしともかりしうれふしろう遠
川ちりかてう物語まうしもやめやゝもそうしとう
ちおもろう語夢の
菜の
むらぬ
葵のう
はなの姫君と世かりしきさ
人のいでこをよらゐくわくそしわよいそうく
とうくひきまさりうちもみをふんひとけく
平生の心まもわれ
うかうく
河　ひかやかりうゑちそうゞ様く
いうきふてふろごろいつくそそしらうおくう
なだれく語しとさびきこおつさよなきらあをん
御息所の
うわさよ男をとそくやつこさんとかしな
なすん世かし語ありくうもあれいさるのもぬ
まさき
ことふまゝ人の御いめよなより海のへしとさし

大人 日本紀 梅花集にひらく人の御身のうへの事は
人の事ふあつけは 御息所の事よ
すてられは 御心くるしく思ひよる
かたらひつゝも物をおもふなる
人のいとよくらくてよろ
つをなをもへき さまに
こゝろうき
いひつけらるゝ 御息所の
事又々大臣の事なとい
ひけらしくものゝ見

思ひもかけず 細 思ひ
とおもふ物を思ひやる
にもすゝろ思ひやなと
おもしろかりける心
息所の御事
細
さしもあらむとぞ
のことはなれん御さまの
とは後にのこるさんと
斎宮のくだり給ふの日より入
給ふさまをとおこし 河九月斎
宮の御のとき延喜式云 凡斎

とひ出ぬ世すれはすてられたいとくるしひ
なし行べきにもうらなりと物ぐるはしくな
うしろめたくおもひしられ世の中すくなかりしてのちは
うらみのこゝろはよのつねならぬにやあらんそれさへ
人のうへにかくいへとあらうゆゑしき後の御人の
秋のあはれもきこえしおもしろきしひつゝ香
あらまほしきをのはなしともいへつまるまさにらる
いうなる御ありさまにはけしくしむし人々とゞめ思ふを
物をかり。秋のあはれそらよ入すふ色にかはりしと
さ御心くさうらうしとありて。御秋のかわ九月には
いやかくの御文よりはらはれひすへてければかくてびの

主殿 寛弘 九月一日 斎宮
野の宮 和 伊勢斎宮の野宮は川よりの斎院乃野宮
て 伊勢斎宮の事也
うひの御 細 斎宮入
まうんしても又よの人
後は

斎宮の宮人
斎宮の宮の人なれは
の行かたし
師説 斎宮のほとりとは
職原抄云 伊勢斎宮寮
頭一人 相当従五位下
四位五位殿上人若諸
太夫任之
助 権 相当正六位下
允 大少
属 大少 これらあり

御つらき人のいそぎこゝろをねてあはへるよふてあ
やしく御おもしうらめしくとゞまりつゝかや
ふ御よひ文人へいかならふ御いのちなど
さ御くつかりも行所ゆくらくおほさき御よ
かおもひそこにもとなくまつひて月日を
もすり給ふ御扇をつかまつりひさくしもて
どおもさのいとうへの人かたくなり
のいと御なげかりかすらすへくも月ともあ
らぬとゞられ人をとゞめ給へるさまは儀よれあらし

さすらはいうしうてうせられて
さへりきかねさし是なうら
除たよりうしう調伏され
てきすうよ物をとく
ゑこうしゆうへまんや
物の事のいとまうく形を
ゑうしゆうわれのとし
されいよわうやうわらん
お除こいうもよいのりふせ
られて物の事れぬべきこ
とわくまやなしと定き
此けようさうのさ御よ
葵の今かとこえすハ源氏
よ逃云しまふうやとむを
見捨まて退のふへ表な
分きなく
法華経 細 敏達天皇六年
渡本朝ニ羅什三藏譯ス又
推古天皇御時聖徳太
子逆持法花経等ヲ遣渡ス
小野妹子ニ おかねとやめ
て法華経とよむし

こわりてかやとすへぐいとしぢきこれいのりのろう
ぜん法くしてさうせすれと例のしうねき
物のけひとつさらによこうれ本んとなうき
せんざいもめづらかなりとめてかやむさすぢ
よいとじうてうせしれくぬぐしげよかさを
ひくをとらしゆうべすへやかねよさうしやべさして
あとのすふされつよあやうわんとてらうさ
こう千れるよいれてそうらいむけよつぶ
つるのさ御よまのし給とこそしと御行きさこ
とをゆうきすりかやうてかくもこやもそう
そつきさ給つうらのそうしよおこゑさ河めそ
法花経をよみきいうじうてうそうこゑき

まそ人なよ 御使なり
ともせ庭なえうまへし
うして家のろ中 し
かさゆひてうらをたうも
お婆と引ゆひて四なよ
そいうく
うくでても
細 葵上のうく行前く家 よ
方こ御とえ御て見まよ
く
例いふしまうつうく
葵のひのうろ源よ対面の
附ハ物法くおしうしまゑ
と物のきよのそひうわれなよ
葵のさ御堂のわてたまし
ようつうさ御くし

怖のうこむしう引おげてうさそしまうりあへ
むいとおかしげめて御そらくハいくうさ
うてあしきまつるさ御しをそへずよふさ
てまうんよらろえされめべしおもして
おしうりうすつう共隠をことりかうわ立ろ
さ心ぞよ文あひいてうみやうめてれぐし
いとあうらうらうき我みさゆひくるうそ
へさうとどうでそさらうげよか御めさき
うろうさそ外そおうりきれとうめ物よ
とうへておるいうじかうさこめとうを給う
あうてもつのをえとうしまつさとかきこの女
例えいとまづうくしくさいとじげなつれ

渋のこゝろ〳〵 細 葵上よ灵
れうりて源氏を打ちりう
門とこらえて盃日
かう気のわこうん
源の御中ゝと若子の惑ら
云せ
ふまよことも いとしう
おもひ葵のなんしてそこの
なくさうんうと此
くよひまふこ源の御かり
てのまふし
ふう打うしもうとうれ
細 ならせよこも まぬの乃ハ終ま
しらてこと気そ五日おこまひ
こゝろすくなりのふしもそこ
つうご葵のう中ハ 細 歌す
の契ハ一世とそうすうれ
九今ハうすさめての終し 日盃
、でおもそや 細 葵上の詞
くれ息所の灵の入うりて云
也 お 丸役のるしにあるそく
多のう人のいとうらうそ
調伏をうれていくくうーれ
と調伏やうてめあへしいとん

まうんぞいとしうげようけてうらみまうと（盃 若からう御へ執心の眉ちも）（源氏をさし みつめ）
すみのし終よ洞のこぼろゝ陰をさのふかきに
うじ気のあさうしんおもりいさうなさうへい（細 葵上と）
むぐうしきかやさうの内こそをめがりしよりく（細 源の心く）（細 源をとらへ）
さ終よつあくぐらおしう笑く絡をやゝと御源（終ようけくく）（名はおしとまふき）
してかよてくもいとしうる笑しいれそうり（細 源の詞）
ともそしうい物とをどいうなりととうれらば（生執やうそまうひんとのおへ）
あふをあるれば あいめんいありかんね ぐるみ
どもふゝきらぶうあうやゝ中いぬぐりてとさ（太政大臣のむすめ）
ざかれいおひうゝ源どありかんと物ふをとるべ
くさめあようそおくゝどやゝあの人のいとく（発語の詞）
おいふ代きうやをとめあへとそこん中そて

とて源氏をよんひよせてうり
とかふく
物の人のま…ぬハ 河後拾遺 物の怪ハ源の霊も
我身よりわくれいつるむ
うそそこう 和泉式部
なり
なけさわひ 細 女の出ぬ
るをむそひとむかるすあれ
くくむそひとめよとうう
うてそとおくうよ色しき
しうらけらく 験ある
むのうそうん来つくみ
え女むひとひせよ右備に
誦文 女いうりやハ一れ六
さくいもは凡ひとめ川去
うへのつま
あくゆうう人のとくく云を
おは息所の灵よおまつる
と人の云といひうりとまさ
をおつまもし云さま
よくをうようごぶつくと
おうぬとわさまうしく源
のみわらく

なんぞく悔つうらんともさうしにそへぬ ぞよの（御息所の心中ようへ可よかもお遠るす）
そふ人のさ悔しるゝえげよあくぞうさしりのり
あんすうをとけ川しげるよひゝあ
なげうさうび室よそうぞくわづうさ角と絡（物のけの詞）
ひとじめよもとうひのつまとの終てあけくひ（もとより）
その人かもあしびゝうりまゝつうひとあやしと（葵の上とも云）
めがりめぐつれよさづさのは息所なりきうのさ（源氏の云）
おしう人のとくいか源はうらうぬ物ぐるもの色ひ
出うこしと笑めくめがりでのゝひけ川をめる
とすく世よりうろてよ ておりきれとうと
おうさうぬおるむうし物がされてくの
多へどされとしとまつねさしうよの多へとの

まの御ゆるさせ
大宮葵上へ退まで
りしかり今葵也えやを
まお御ゆをどりとそろり
まゐるりかし 孟 葉花物
語に一条院の母東三条院
よりわれまゐることを云
ゐるよしゐるしのゝせ給
て宮御ゆとぞいれまいらし
めたまふあり御ゆとは湯也
也のこと切也し

山の座主 細 義真和尚天長元年六月廿二日始補天台座主一号修禅大師

まへば、たゞそれなる御ありさまに、あさ
ましとはよのつねなり。人々ちかうまいるもかた
はらいたうおぼさる。すこし御こゑもしづまり
給へれば、ひまおはするにやとて、宮の御湯
もてよせ給へるに、かきおこされ給ひて、ほどなく
むまれ給ひぬ。うれしとおぼす事かぎりな
きに、人にかりうつし給へる御ものゝけど
ものねたがりまどふけはひ、いと物さはがし
うて、のちの事又いとこゝろもとなし。いふか
ぎりなき願どもたてさせ給ふけにや、たひら
かにことなりはてぬれば、山のざすなにくれ
とやむごとなき僧ども、したりがほにあせを

いまはさりともと
抄 葵もいや別の事あるまじ
と人〻の心をやり
給ひけるなり 細 誕生の奥
きめてしるは皆人ゆるされ
給ふべし 抄 夕霧は源の
御子は始ての御子なれば
よろこびあれば猶しく一段
と興ありつるとなるべ
し
うぶやしなひ 細 三ヶ夜五ヶ夜七
ヶ夜九夜のうぶやしなひ也 礼
記内則篇云國君世子生
告于君接以大牢注云接
讀為捷捷勝也謂食其母
使補虚強気也又左傳桓
公六年傳曰九月丁卯
子同生以太子生之礼挙
之接以大牢
みこたち 細 家の子男
そとさるゝ作法ある
いりて西向しとき
うしろめたくおぼし
細 御やすん所の事 都に付く也

おしのごひつゝいそぎまかでぬ。おほくの人
の心をつくしつる日ごろのなごりすこしうち
やすみて、いまはさりともとおぼす。御修法など
はまた〳〵はじめそへさせ給へど、まづはけうあり
めづらしき御かしづきに、みな人ゆるべり。
院をはじめたてまつりて、みこたちかんだ
ちめのこるなきうぶやしなひどものめづら
かにいかめしきを、よごとに見のゝしる。おとこ
にてさへおはすれば、そのほどのさはふにぎは
ゝしくめでたし。かの御やすん所は、かゝる御あ
りさまをきゝ給ひても、たゞならず。かねてはいと
あやうくきこえしを、たひらかにもはたと

きけはわらくさゝすくめし也
らぬ御心を思ひつゞけ給ふと也
る同し御助字也
御ぞなどもたゞけしの香よ
細 邪気の護摩にハ芥子
をたくこれを香爐御息所の
衣にしみかへりし河 邪気
の物怪の時護摩に芥子
をたくなりそのかの香邪
気をさくるとなり
御ゆするまゐり
細 髪あらひ給ふなり 史記ニ
沐の字をゆするとよめり
孟 御息所の髪と衣裳
とをあらへどもその香
せなく
いとゞ御心がはりもまさりけれ
細 こゝろは息所の心のうちに
物ぐるほしくなやましければ
さながらもとのやうにもなりがたく
おもひもよらぬ事と思ひ出て
たゞなやましく成給ふ
そのうへ気色のあしくなり給ひて
ふるき御心もなく心ゆくさまなく

とら給しあやしう我にもあ
らぬ御心ちを思しつゞくるに御ぞなども
たゞけしのかにしみかへりたるあやしさに（護摩の煙にしみたるや）
御ゆするまゐり御ぞきかへなどしてこゝろ
みたまへどなほおなじやうにのみあれば我身な
がらだにうとましう思さるゝにまして人
のいひおもはむことなど人にのたまふべきことな
らねば心ひとつに思しなげくにいとゞ御心
がはりもまさり行大将殿は心ちすこし（細 葵上ニ異見の入らせて）
のどめ給ひてあさましかりしほどのとはずがた
りも心うくおぼし出られつゝいと（御息所とのことを思ひ出し給ふ）
ほしう心ぐるしくおもひけれどけぢかくてみたてまつ

いとほしくまうでゝ 御息所へ久しく無音なれば心づきなく思給ふらむと也
まさりてうつそまつらん
対面わかんハ何とやらんうとましからんと也 下心おそろしく
ゆへにいかにぞ
細 御息所へ文つかはさる
なり
御ありきもなし
細 此程も源のよそへ出あり
きもなきなり
こともあひさうらはで
細 是より若君誕生ありて
葵上ハ無事なり給へる
とみえし 此 左大臣威勢あ
る上源氏をむことせられ
る若君さへ出来給へば
時 左大臣家よろこびすくなかる
ひとしき時ハ此れハ源氏と
く理なく葵上の心なりしハ
をさまりたるやうに此物語ハ
てとしるべし

まつらんはいかにぞやうとましうおぼゆべきを（細 源氏の心 御息所ニ也）
人の御ためいとほしうよろづにおぼして御
ふみばかりぞありけるいたうわづらひ（葵の事）
し人の御なごりゆゝしう心ゆるびなげに（[illegible]の心）
げにたれも思したればことわりにて御（左大臣方の事）
ありきもなしなほいとなやましげにの（葵の上の心）
みしたまへばれいのさまにてもまだたいめん（葵と源との御事也）
しまさず若君のいとゆゝしきまでぞみえ給（夕霧のうつくしき事）
御ありさまを今よりいとさまことにもてかしづき（源氏をさもてかしづき）
きこえ給へるさまおろかならずことはりにて（左大臣の心）
ひきうつしてゆゝしきまでもてかしづきこえ給へど（盡志也）

さりけりとしうかし
細 あさきの異なのあげくる
きほとし 十余年さきえ
とあまし　おか 夕霧の巻
文は泉殿に似たるより
ありましくて来まる
なるべし
とりしけるきさ所
葵によろしく対面あり
さきと源の作らせる
そのまゝひとへにええんり
のとわりつきさうかは
葵のそりよわる気のまし
源と葵上の御中ませ

とさひさきしまつるよ。うこのれとうちを（葵のうきさとそもとるまさへ）
こうりそまちぬと。なりしけく地風そど。
さぞうりつきじらちしみ給ふまそてふしみが
してはぞりいさのきいなとともぞりつ給ひん。（おか 比段にて御あのゝへ）
わか君の御まみのうれらしさかどのきるまよ（夕霧の）（細 冷泉院にて）
いさどうみさそまうりまつるとふるそまうう（純似母ひまゝて）（源氏の）
給そとぞ何ともいひ出しれさとあるこそ
びこくてまうありんしそくらかどやを（東宮への）（源の葵よのまて）
あまりあさしくまつり給しねばいつぶせさは（細 多けあり）（御しわさし）
そふかんうるざうし給従そふしけらさ
なりめて生もうせいや。あまり地ありつつき
御心のへぞそくみとうしさゝの人の人まいりが（源の葵とて）

さやうよ疑よりのとつぶそて
まじまべきるよりとそて
葵のえうら源をいたとえ
異事まはゞよまそけのく
よえんまのとわりべきま
とわらぬざいつりけろく
まりとえるぞしう扱で
しそてるぞしわべきるまりうと
てかすまつる所よ思あり
かけてよろかたり 源の
葵のつらへとまうそのとて
葵の字なる文字くとまるく
八かうせしれとし
されとひやまよ おしろけ
かうち面るまうしつるよ
と在え
おむけまいさまもさてる
やきよ 葵の物のけよか
まひて文相まさらへさす
あうとのきひし所のまく
御ゆまうれなし 細 源の九
まさるきりのいろ方なる
さしんてさうし 孟 源の
葵をあうひ事称とそ

うらくまえん本乃とあえへまさことうたりて。
御給ぬる所よ中まいらく系りられど。（細 葵上に対面なく）
いりて物まじ中まのみ。御いへはぞ中まく給（源の御庭へ）（葵のと）
かも御給ひてよはあまうち。されどひがまへり（源のと）
まさ人とさひきそくし御わりさ使者。地わり（源氏の）
出つれど葵の御らしそゆくしそらし給乃（中わ）
ことのとなじ中もし給つつでよをとおむげるよ（葵への御答あり）
いきもてしうるやうるよゆえそしう。ひと云い。（物のきの入りう）
つぶての給しこじと地がしいづるよむう（て源よ物いひしもし）
まれいゆやるてまりきこしいひし地かれ（源ひらし）（葵よし）
どとまういしても御けるよ地ありとあさまでしてそ。（葵の物思ひるうちへ）
御桜まつれなとうへあいろひさそてあまさい

いつもひとりしくへとし

と比何ゝすと 細 しころ
うとくしうりしと源の返
梅ゝ何も不足もなき人
となりがなかのおれども
源の心の中をひらく葵の方
くゆるべき事也けり

抱やらくん陰のく
はなく此事なまきやうに
此出生性ありて常の此度
不よそ出かりしまうさ
めとくし

湯まゐらせ給ふを人々あはれと見奉る。いとをか
しげなる人の。いたうよわりそこなはれて。
あるかなきかのけしきにてふし給へるさま。いと
らうたげにくるしげなり。御ぐしのみだれたるすぢ
もなく。はらはらとかゝれる枕のほど。
ありがたきまで見ゆれば。年比なにごとをあかぬ
ことありておもひつらんと。あやしきまで
うちまもられ給ふ。院などにまゐりて。いととう
まかでなん。かやうにておぼつかなからず見奉ら
ば。うれしかるべきを。宮のつとおはするに
心なくやとつゝみてすぐしつるもくるし
きを。猶やうやう心づよくおぼしなして。例の

おもりりく 細 母宮のおもり
よ御さうきんのやうにおもり
ひまちをとのゝ 師 大宮の葵
上と御さまきまかしの事
よおのひまのやうに入それおは
よ大くこへはとめらくと此事
係る事ともの事ふくへ入
ハかハなしとおもうとし
つゝりりはめくめ給く
細 葵上の源よ目をとゞめ
て見おくる給ふ 勝 葵上の源
氏を見つゝ給ふもさく義之
秋の司召 細 八月也
縣召を除目と云京官除
目と云。除目ハ天武四年
二月に始る 師 春の除目
と縣召と云ふ。春ハ外官
外官とて外国の守介
掾目までを任せらるゝ
秋にはわかくもめ秋
の除目を京官と云ふ。ね
と京官より諸司まで任
されるゝ所を是と司召と
いふ。任秋の司召といふる

御座所にこそ。あまりわかくもてなし給へば
かたへはかくもものし給ふぞなどきこえをき給ひて
いときよげにうちさうぞきて出給ふを
常よりはめとゞめて見いだしてふし
給へり。秋のつかさめしあるべきさだめにて大殿も
まゐり給へば。君達もいたはりのぞみ給ふ事
どもありて。殿の御あたりはなれ給はねば
みなひきつゞき出給ぬ。殿の内人ずくなに
しめやかなる程に。俄に例の御むねをせきあげ
て。いといたうまどひ給ふ。内に御せうそこ
きこえ給ふほどもなく。たえいり給ぬ。足を
そらにて。たれもたれもまかで給ぬれば

雨もおり〳〵なとは勿論なれ共秋のつかさめしといふは司召也除目の事なりや河海に委し
さかりのそゝき給 細 人〳〵司の事をのそみ 河 労望(ラウマウ) 官の名之
こゝらはかなくしそこ 抄 内裏に左大臣のまいらるれは人すくなになる也
えいりたまへり
山のざすなにくれ
山の座主をはしめとしてなにくれとやむことなき 花
よろつの僧ともをめしてあまたの
おもき人のなひつきともあり
ありし夜の事にて御修法なとも
とまりてありける夜中なれはわひ
しくて御修法にまいる人もなかりし
ことなりとそ
ものうき人物にそあたる 花 細
あまたの人もなき
さわく 此詞 常花物語にも
あり 拒 人にあたる也 行わ
ふかく
ゆすりみちて 河 動(ユスル) 細 鳴 日本紀 師 動さゝ
ゆすり さわく也
まどひ さまざま
御物のけの たび〳〵 とりいれたるを
おもひ給ひて 細 死
人にはかならず死に近つく事
ありしかは かくもや 御心のまゝに
ゆるかしおきて後のわさ

ぢもくの夜なりけれど かくわりなき御さはりなれば みな事やぶれたるやうなり のゝしりさわぐほど夜中ばかりなれば 山のざす なにくれの僧都たちも えさうじあへ給はず 今はさりともと思ひたゆみたりつるに あさましければ 殿の内の人物にぞあたる 所〳〵の御とぶらひの使など たちこみたれど えきこえつがず ゆすりみちて いみじき御心まどひども いとおそろしきまで見え給ふ 御物のけのたび〳〵とりいれ奉りしをおぼして 御枕などもさながら 二三日見たてまつり給へど やう〳〵かはり給ふ事どものあれば

してとさしもふかく 抄 又補
生かへるやとて枕をもなほさす
て二三日まもり給ふ事也 補
生をねかひ
給ふ故に よろつのうれへの事を
そへて
事に事をそへて 八六の御息所 葵の
上の物のけになやみ給へるを
おもひあはせて世の中をうく思し
みぬれて
ふかくおぼしけり はかなく
よりて御身の上をそへ
よはひとゝもにいとゝ思ひ合せの御
なけきふかくひとりのみ息所の
の事ならむと ひとへにいとゝやう
よみしにけれは
えりてうれしくあつかひ
給ふ御事なれは歌の上にもあまた
あるかたのつらきを歌の中
よりてこれにのこりと
左大臣家のそこに 師 哀れ
しきりもうきもよはひの
そのうれへは御なけきの
はやくつりのみ 細 種生

かぎりとおぼしはつるほど たれも〳〵いといみじ 大将殿は かなしき事に事をそへて 世の中をいとうき物におぼししみぬれば たゞならぬ御あたりのとぶらひどもゝ 心うしとのみぞなべておぼさるゝ 院におぼしなげき とぶらひきこえさせ給ふさま かへりておもだゝしげなるを うれしき瀬もまじりて おとゞは御涙のいとまなし 人の申すにしたがひて いかめしき事どもを いきやかへり給ふと さま〴〵にのこる事なく かつそこなはれ給ふ事どものあるを見る〳〵も つきせずおぼしまどへど かひなくて日ごろへぬれば いかゞはせんとて

かやうにてなやみ給ひしのち
とし給ふは見え給ひてそ
こなたかなたへうつり行く
鳥辺野とよみてもよきなり
葵の上の葬送のこと
細 葵上死去八月十四日の夜也
葬送ハ廿日あまりなり
院といふハさきの帝 抄 桐壺御門也
いの宮 春宮
つ宮の事 冷泉院なり

もごよふこと
細 文選第十二郭璞江賦云神蜈蝮蝹輪以淪遊 注云神蜈蛇也蝹輪行貌也
又日本記ニ一豊玉姫化為八尋大熊鰐匍匐逶迤
以是もなきにひあり
く見ゆる也
さうなるひとけり見ゆ

はるかなれバいつくはまんとて鳥辺野にゐて
そそまつる程いみじげなる事多かり。
こなたかなたの御おくりの人どもてらでら
の念仏のそうなどそこらひろき野
所もなし。院をバさらにも申さずきさ
いの宮春宮などの御つかひさらぬ所どころの
をまいりちがひてあかずいみじき御とぶら
ひをきこえ給ふ。大臣ハえたちあがり給ハ
ず。かゝるよはひのすゑにわかくさかりの
子にをくれたてまつりてもごよふことゝは
ぢなきたまふをこゝらの人かなしうみたてま
つる。夜もすがらいみじうのゝしりつるぎ

つねのことなれど 細 源ハかやうの
ちか人のうへめでたきをハ久しく
しらぬ事なきなく 抄 葬送の
ことはつねの事なれどもいつくおり
すくされど源ハかやうのこと
ありがたきとなり
人ひとりかあまたしも
細 人ひとりをバ夕顔上を
云又夕顔ヱりうしと共に
なくなり 孟 夕顔の外に葵
の事と不見給ふ
八月廿日の有明なれハ
細 ありあけの月のころ紫
上に別れ給ひしも此夜の月
のことをおもひいだし給ひ
明日
のぼりぬる のぼりぬる煙
く葵の葬送のこと其煙
のりまハいづくともねた
ふて空のあはれさの哀なる
よくたの哀なれ給ひさ
悩そうのさまあられ也
るらんへそのかたなる
抄 葬送の火車の内そ

しきなれど、いともはかなき御かばねばかり
をなごりにて、暁ふかくかへり給ふ。つねのこと
なれど人ひとりかあまたしもみ給はぬ
ことなれバたぐひなくおぼしこがれた
り。八月廿日余日のありあけなれバ空のけ
しきもあはれすくなからぬにおとゞのやみにく
れまどひ給へるさまを見給ふもことはりに
いみじけれバ空のみながめられ給ひて
のぼりぬるけぶりはそれとわかねどもなべ
てくもゐのあはれなるかな。とのにおはしつき
ても露まどろまれ給はず。年ごろの御あり
さまをおぼしいでつゝなどてつゐにはおのづから

しうよ我ことの御は敵よ
れくしつきてとおり、
るとそておよは　細 年比の根
わうき物をつるよハえるを
さうへ子をとこ拙どとく
せとへてうしくるりしさ
師 葵上の御さまへいうもあ
くけをてるうしさ候なん、
しまく 御 葵の御中を源
の今とひのかく　孟 二十月服
よハわうりそ
也 細 本妻の服の色之色の
薄キ也輕服之 呼日
わりさはぎくおしらく
細 源の我さまきてらハ葵
上ハ重服なり大き物とを
師 令云夫者准ニ父母ニ服五十
日服一年
まらりあ色ハ　細 服あつて
宣うる渥服と見る人るを
大く歟上よふ給ふ時此衣
の色れ濃うつとりう
呼 湿かうく、物忌 今とて
の宣あれハさのふうくもそ

らされぬ御ぞんとのうらまさひて、かへざ
りのおもひもつけてをつうしと御覧しられさ
てまつらん世とへてうらうらげりきの
まどひて、ゐそて給わらず、くやしきこと
ほのくほのつけられどいかにしにばめる
御ぞたてまつれるも夢のここちして我
さきだゝましかば、ふかくぞ染め給はましと
おぼすさへ
かぎりあれば、うすゞみ衣あさけれど涙ぞ
袖をふちとなしけるとて念ずし給へる
さまいとゞなまめかしさまさりて、経忍びやかに
よみ給ひつゝ、ほうかいさんまいふげんだいしと

めでたくして　拙 同のなかさとぞわらはくるかむてしてえく夜哀よりうまくいうくし
ほうかいさんまいふげんだいし　河 法界三昧ハ普賢菩薩の徳也。天台五佛頂懺悔 傳教大師作
南無法界三昧普賢相 又大唐西院和尚礼拜詞ニモ法界三昧普賢菩薩 云々
文句云、大論称菩薩為大士、亦云開士也　細 普賢ハ法界にわたりゆく所作を三昧と
いふ 呼 観音ハ慈悲三昧に住し給ふごとし
なまめかしさのまし
細 経ひとく形見のまされる
かりそめに何よ思ふの草をつ
まうし 師 此哥ハ続後撰集
に兼忠がめのとぞ
わすれ奇て
御わざのいそぎなどせさせ
細 此経ハ廣方の経要なるを
なんしと思ふあまりしかの出来ぬ几此物語
威着不義の理とつけく
出所きりて葵上ハ夕霧
を誕生のあとく思ふもな
くすぎなん思ふにはすお
承とそう 師 御わざされい
まき八七日くの法事く

うちの給へる、おこなひなれたる法しより
はけなり。わか君を見たてまつり給ふにも、なに
しのぶのといとゞ露けゝれど、かゝるかたみ
さへなからましかばとおぼしなぐさむ。宮は
しづみいりて、そのまゝにおきあがり給はず、
あやうげに見え給ふを、又おぼしさはぎて御
いのりなどせさせ給ふ。はかなうすぎゆけば、
御わざのいそぎなどせさせ給ふも、おぼしかけ
ざりしことなれば、つきせずいみじくなん。

なのめにかたほ　細 若子
をだに許してかゝり　孟 只大方の
子さへかくあると也
細 袖のうへの玉のくだけ
細 [illegible]
不幸[illegible]奥入云 非本文 [illegible]
掌之袖上珊瑚[illegible]
[illegible]切なるなるべし
すくよはかゝる
あふひのうへの[illegible]
孟 源氏のとかく[illegible]
みそかの[illegible] 二条の院の
のほとり　細 八月に諸司に
入なり　[illegible]中に大内の
[illegible]入る[illegible]
[illegible]の司へ入[illegible]
みさ[illegible]
あるは河左衛門府[illegible]
近衛以小柱[illegible]以東廳
屋[illegible]
[illegible] 細 [illegible]潔 [illegible]厳
[illegible]
重[illegible] 源葵の服
あかはれいと[illegible]
うしと思ひしみにし
[illegible]文は
[illegible]
[illegible]葵の[illegible]
[illegible]世の中[illegible]
[illegible]源の[illegible]世を[illegible]
[illegible]葵の近き[illegible]
[illegible]息所[illegible]
て[illegible]世を[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
[illegible] 河 [illegible]
[illegible]
[illegible] 細 [illegible]
念仏の暁[illegible]
[illegible]
風の[illegible]
細 [illegible]
[illegible]秋
[illegible] 河海に[illegible]

なのめにかたほなるをだに、人の親はいかゞ思ふめる。ましてことはりなり。又たぐひおはせぬをだに、さう〴〵しくおぼしつるに、袖のうへの玉のくだけたりけんよりも、あさましげなり。大将の君は、二条院にだにあからさまにもわたり給はず、あはれに心ふかう思ひなげきて、おこなひをまめにし給ひつゝ、あかしくらし給ふ。所々には御文ばかりぞたてまつり給ふ。かの御息所は、斎宮は左衛門のつかさに入給ひにければ、いとゞいつくしき御きよまはりにことつけて、きこえもかよひ給はず。うしとおぼししみにし世もなべていとはしうなり給ひて、かゝるほだしだにそはざらましかば、ねがはしきさまにもなりなましとおぼすには、まづ対の姫君のさう〴〵しくて物し給ふらんありさまぞ、ふとおぼしやらるゝ。夜は御帳の内にひとりふし給ふに、とのゐの人々はちかうめぐりてさぶらへど、かたはらさびしくて、時しもあれとねざめがちなるに、こゑすぐれたるかぎりえりさぶらはせ給ふ念仏の暁がたなど、しのびがたし。ふかき秋のあはれまさり行風のおと身にしみけるかなと、ならはぬ御ひとりねにあかしかね給へる

の前栽もくもゝに庭ー衣
のつゆらんやうにみえさ
見まさむ秋のさ夜風吹
るへかみかし人の家まさ
てあきとあそれなりつへさ
まや 哢同
菊のうつしろふ 細 赤間と
ぞり 哢 らうけにしき
かなりへし
こゝきあさみひの 細 もみつの
こゝさ菊のえれ色に変へ
るかなりへし 哢 花田に
舟のましわうて 服差のゝ
心の紙乃文之
さし重ていよ有り 弥名
院の御乃さしをさそいまり
とハ御息所よりの文ハ初め
しゆりく色くさく見ゆ
とりそてさしそさうらや
きこくねれとハ 称名院ハ
院にこさしねれどハとは
斎文のきよまうりけり
ていりねしと云文の詞之
孟日

けのうりわうわうよふうくのうし花ぞあり
えぞよこゝきあ紙あひのかゝさなるふきつけ
てさしとゝそていよかりいまめしうもとゝそ
こまへりやま前のけはかゝりがめしね猶て捌し
らうしんや
人の世をあくまれとても秋けさまをく
あく袖とをひまゝやまさて今の色よとをひ
まへおまつそすんとありつねまもいやま
とうゐまつるうしけもてによ重ぐうう猶袖
うゝうれるのけにあらひやうんとしとさり
とぞかきこしとりとるもひゆきうむもいやく
わくく人のけ名のくらぬべさこゝと見えし

哢 菊によせたり 細同
源氏をさ読之
源氏息所の文をさして心く生坊

さて源の御方よりもさうゝにおかしきゝふんとあれど此哥可為ゝ 孟 哢 花よさ
めしね猶さ文の詞し源御息所へ此猶ふ分りうくしき猶よとひのふゝうくるれとをとそ
わたれのるうしさまとや 細 文の詞し人の歌ハ同よつゝさみやさ為すなれハこの心しをそ
つへやさしおとし
人の世を 弄 葵のうへと御息所の心男よ思ても帝斎宮よ源の袖の上をひやうさの後
こて今の心をうひのかへおまかりくうす
まづしひありへどもりくし此ふをそ川まくまきまりり 師 わうの意よ云そのふ之
さもうよ重がうう 細 との川ら此あくらのうハちくうきうれ九うら
て只今かくしひありへ
つれうのけらかうしひやと 細 との心わ
あわこゝろまとさゆくと
孟 袖の前に云しこと之
細 さやうよこゝゝも前の東よ出
まうしとえてとゝく人の御よ
てゆうべき袖とをいかゝやし
さとく
前斎宮のけさよまうり
細 と斎宮ハ一院の御事
なりうよ依て此様更より
文とまゐうまらうすまゐ
分と源のまかうひ給そ

ぞうろみうしく人いとそもうくてもまうへさ
よろそハ袖ー給ひめかなめくさうことをさぶ
くとけうやうよこゝくつきんとくりやしきハ
わうけ心あうしさす絵え捌りしなそぞとをまずき
かありうし秋好の中宮よ海ゆりもまうく
わくやかとしあうしうとひわうくひまへどわ
ぐとあうれうつうるすくそかざけなくやと

浮まし沈經ハうつたへ　花浮く
すゝきハちぐさかきくさを
見しりもせぬしらぬ人の僧達
どれ義りぬともしらりて
申さぬとこ又さすらひとふ
なかりけり是ハ御息所の文
詞よきことぬ經ハかり
たまへんとありしらそ
それさまをさうらうあらん
こゝさの人とをかりしされし
といへる詞しもうしハ御息
所よりの詞も昔ハ音
信も申さねしいへる義と
そ一説花師　花細弄孟
の説ハ各別也
ことつ男も　おほかたハ世君
のおりさ毎ハ消ても
もかはし玄男葵
のかたとをそしひる
おへもそへるさすとい
て下のんハ御息所の物をも
なとよおもハ逢桃見れふ
うさかそさてすしふく成
せしう做なりへし　細世君

て、せうゝきのみはめりゝきよこよなう物
細　文ノ詞の始こゝの歌と
細と八思とこうえ言ひ之之
どく侍よりかゞやきひまへいとこさうくる存ずらう
源の心ハ志ぎ出ねとあこうく
なり
給まし沈經いさゝかしるゝ事もへん
源の腹えのうすく
とそなる
源氏言之
とゝまり男を消しものなしる世よ人を
源と云之　葵と云之
かうん經ぞころすさびハかゝり所て
物語
よりしれんをひもやとそ、これのもとさ
こイ
こゝろり、墨よかわりさる、給かりかればあび
九息所の六条京極の宮也
てゝ経で、消のめくゝるゝ事まに、とんなる
細　所の御八かりしきて、まうしの詞おきこ
さりてと云之
とゝめしそゝうし給そされいゝのもとの消ゑと
細　御息所の心也
いとゝいつとなきいとゝうかなきもうろさ
なりもうゝやうなるにゝうたくあくりて沈みと
相え之

の無くとそう下の句ハ御息所の物の意をよくあらはしたりとこそ見ゆれ　細さくなと
さんらん下の句ハ御息所と聞えし　孟はしたりと云之　花わかる
人の心ハかりしもちて　河　此経のかたもそひけるへと云之　孟根をかりしらせよく云之　花何
ともおぼかりせよさのことかりつゝそとあれハ物のまゝにふるとあのめくしりうつ物く
細　何ゆふも世よんみくおしそ根をのこゝハあれるゑしと云をと義訓のん　師花細是評
浮らんせしてかやしく道ありし　細これふりと云句河内本これよりしあり花る類義同之
探所の文ハ用ひハ御らんせしゝ消そのゝえを云んく云く　細れとと書表紙ハ見ゑりて
へしこゝろもうひいらしゝ　評眼あの男ゝりの文なれハ此消えをとめし　此文
されかうし御目をもてなしさねかりしとつゝあらゝ細かれやへし　孟日
かわやまらゝるさんやとうん　細吾身よ出もりかりうゝ御の思ふさんにあらへ河
こせんばうの心ばつ　と云を
細　故前坊ハ桐壷の御門
の御兄すへし兄すよまう
ても御弁ときひるなし
この歌の心ハうを
故前坊の母のすと桐
帝へ聞えよりのあひ給ひ
とく
その心のうちを　孟　御息
所ふをとめへさうら見と流
の作くとこし　細　前坊
の心へうゝよりと渡ありハ

いよ〳〵かゞみさん。こせんばうのかくれさせ給ひて
故前坊
りうとふかりよを、いそう、さひりうく
相帝と前坊と之
さてしさをのぞ、この歌の心にとをね
んぶろうよまうてしつけさせ給ひしかば、その
れうりみをやかてそて、まうりあけん
などつねよの絵をそえて、やうそへらせまうし

此あたりは猶く内住をと
しきりに今迄よりもいひ給しか
ども自然院の寺にも御心
ひけなかるべきの有く
いと参りまいらせし也と
さるは大かたの世につけて
御息所をさしていふ
はさりなくとも心にくき
ひとしれずこそ有べく
細 よしある人となり
孟 御息所より川人ゝまで
くれずふところ
野宮のうつろひ
細 嵯峨野よりこの宮へ入給
ひし比此家ゝより天皇よ
しありし人ゝそゐくらんと
よせなどありしと源のさ
まゝなる

給へとたび〳〵きこえさせ給しをだにいとあ
るまじきことゝ思ひはなれにしをかく心よ
りほかにわか〳〵しき物おもひをしてつ
ゐにうき名をさへながしはてつべき事とおぼ
しみだるゝに猶例のさまにもおはせず
さるはおほかたの世につけて心にくゝよしある
きこえありて昔より名たかく物し給へ
ば野宮の御うつろひの程にもおかし
ういまめきたる事おほくしなして殿上
人どものこのましきなどはあさゆふの露
わけありくをそのころのやくになむする
きゝ給ても大将の君はことわりぞか

正日 細 正日は四十九日
の事也忌明の日は四十九日
よりさきにもありのふ
なきし
ならはぬ御つれ〴〵を心ぐる
しがりて三位の中将
孟 源のつれ〴〵を葵の
兄三位中将はまいり
てなぐさめし 細 執
中将は三位に叙給ふ家
までなり
かの内侍ぞ 細 うちわらひ
給ふ 細 祖母殿とは
源氏ことをいひて忘れ
末の事などにや
の歎なしなり

し。ゆへはあくまでつき給へる物を。もし
世中にあきはてゝくだり給ひなばさう〴〵しく
もあるべきかなとさすがにおぼされけり。
御法事など過ぬれど。正日まではなを
こもりおはす。ならはぬ御つれ〴〵を心ぐるしがり
給ひて三位中将はつねにまいり給つゝ世中の
御物語などまめやかなるも又例のみだり
がはしき事をも聞えいでつゝなぐさめ聞え
給に。かの内侍ぞうちわらひ給ふくさ
はひにはなるめる。大将の君はあないとをしや。
をばおとゞのうへないたうかろめ給ひそと
いさめ給ものからつねにおかしとおぼしたり。

かのひさしひのさやかゝりし 細句を切へしとこゝめ句也 いかうとよよ大円山ハのやう の時のまこと赤橋に逢 ありし時のさまいさよひの 月にはゝ中将の源氏どこ 影によりし書陸の文 まそのさまこと 師 赤橋に逢 まひかハ秋のさ あれハ彼いさ まひの月とこゝわれ出の今を さや立へかかひ秋のゝとうや 秋のことそあし 細 赤橋巻に 昭朗に以中将のわれかさ けなかうにとさうかへし時 のさましきとりかくるを切 くらゐへし 曉 孟同 あられうちして 細 是ハ 他日のさまく十月の頃との 事也 曉 又一段く上の詞と 同日のさまとハえ侍るへから 以 孟同

中将君にひとゝのさとし 細 中将の君の多哀いつまそ に絶色どこもくるか 貼へ

赤橋のまへ
みのはしひのやりかゝりし秋のことゝ(句) 源氏中将 わき
そのみのねさの物語
さうねとさ海くのすさことをめぐるこそ
も四角 新さねく
よゐ海るすくいゝひあらそひ給ひてくは
私事けり居になりえんとつへし
哀なる世をいひくそへしかすさかすとも
又他月さ
あすのひゐりあられうらしてものあられたり
かた 十月の哀之
驚かさゝ中将の君すびゑのうさしさわき 絶
以中将の海之
うちとくるよ哀ぐへして世しらくわぶやうる。
ひさかりしきさ海あくまつりまつり。あゐハ本 源氏之
しのつまどのうらんよとかりけて霜 しも
さう
きの前栽そくまよ 稲かりきり風あらく 細 両句さ海之
せんざい
孟 さゝとまむへし 師 点口傳
うま吹きそれさへうけくど。洞をあら ねきさ
君 源の吟しるせ
さふゝらゝして。ゑをとかり雲よやかゝりよ くも

花中将君ハ姉妹の服三月いまた九月也。絶ゑ素哀年 縑色 鈍有裏裏生 素裏粉黄
哀色同絶名ハ移花そそむかしさらかくハ十月の哀の涙によやせりぞひくそくへ
おもふく 河 雄朝 日本紀 雄略 くしきさくしきさゝ 巽 孟 細 同
ありきもかくそふ へ 如時そいのまええへし時雨にありそふろきもありける
雨となり雲とやなりけん 細 劉禹錫か句をひいし 河 有感 咄 二首 劉夢得 庾
令楼中初見時。武昌春柳似腰支。相逢相失兩如夢。為雨為雲今不知。鄂渚濛濛煙雨
微。女郎魂逐暮雲歸。只應長在漢陽渡。化作鴛鴦一隻飛。 歳韻 奥入ニ夢得ハ白
楽天同時之人也。思人によそへて作れる詩也 師云 是詩ハ高唐賦ヲ以テ作レリ 故選 宋玉 高唐賦 序ノ詞
を以て作れる詩也 高唐賦序云 昔者先王嘗遊高唐。怠而晝寢。夢見一婦人。曰妾巫山
之女也。為高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。去而辭曰。妾在巫山之陽。高丘
之岨。旦為朝雲。暮為行雨。朝朝暮暮。陽臺之下。旦朝視之如言。下略 或本云旦為朝雲トト云句未詳神
女賦によりとそ詞あり 神女賦に其詞なし 不審 愚案
せそハえん侍て 抄 源よまま
よりてたくまへん女の
我心のとあるぬ事ハあろ
にと中将のよろめしき
かくゝと哀く
ひとつなり 細 花名絶色
ひとの情しさるに侮それ久へ
さうへしとかりし悲哀のの
そく哀事悲哀にひつてろひ
絶ゑ海るゝへし 師 礼のさ雨之
まとけるさ海とをもし秋さ
くろのくま哀の入ひあ
ありさま絶る御へし

孟 文順
きん。今ハそらくのとかりうらちて。つらづ
えつさのあるゝ時さ海。女まそハえ捨てなくる
らんとまりしゐるらうかれとせらうあんしや。
哀おもしきゐらふよもうちそもれハつらゝ 源のさら 自然
くゝ中将居のさ
ほのあまつれハさとむけるゆうかきさてれし海 くら
へるさ御まらゝひなくらゝらそさうしうすゝ 源氏のと

河 濃宇 孟子 細 三十五

これハ今すこしこまやかなる 細 中将ハ
夏衣しまへる源ハまだ夏こ
ろもを着し給ふ志のふかき
ゆゑ也 抄 本妻の服も姉
妹の服服も七日服三月とも
に軽服なり然とも三位中
将ハ夏衣の次第になるを
しらでなをさらに源は
夏衣しまはぬ人をもよほす
こまこま源の夏衣しかれとも
心ざしのふかき所あれハ也
紅のつやゝかなる 細 花色
まみなり 花 軽服に紅の
給と用るハ長保三年
三月一日定子皇后宮心喪(シンサウ)
によれ堂関白殿て火色の
下襲を着し給ふよし
より改事要略に其子細
みえたり
えたり 細 源の補しまよ
白とこと 中将より絶 劉
高陽ハ只應長立漢陽流
ともいへるに此葵上の妹の
ハ何くとも定かならし

給ふ地 これハ今すこしこまやかなる夏の御なほしに
くれなゐのつやゝかなるひきかさね
てやつれ給へるしもみてもあかぬ心ちぞ
する中将もいとあはれなるまみにながめ
給へり
雨となりしぐるゝ空のうき雲をいづれの
方とわきてながめんゆくへなしやとひとり
ごとのやうなるを
みし人の雨となりにし雲ゐさへいとゞ
しぐれにかきくらすころとのたまふ御けしきも
あさからぬほどしるくみゆればあやしう年
ころはいとしもあらぬ御心ざしを院など

河 葵の妹君かうまを定かたき河海の古本にいもうとゝありてかくのごとし
細 此物語にきゝし他人のうへハ源へかゝりけん事をさや我妹の事
ひとりごとのやう
なりあれよ平下とこゝろなく
こし人の 細 面白きなき結句の婚禮也し中将の心ハ妹の身をよけく源をめでくれと
何事とそ川をそしてひろかりちハをくとなりかし八月源つよかりしがみや十月
なりよなかりけりし 河 まことの所とかをし時分しふくがくへてうれ婚儀之
あやしう年比ハ 細 年比ハ葵の上の心ゆくりてあゆゆちきよ又源門の訓之
の大臣のし夫をもてへるこくのそむかさるやうへ北のと此しよと熱儒の母へ
真実の御かたしれ給ひさしかつへしかく 葵上のあさからしく情さ
ましと中将の思ひしなり

猶うけたまはりしきあり
葵と源の中らひを後
らさてあらしうつくひすと
まふく源の中おもうさ故
いとほしくみえしとく

ゐたちての給はせおとゞの御もてなしも心 (大臣之)
ぐるしう大宮の御かたざまにもてはなる (葵の母源の伯母之)
まじきなどかた〴〵にさしあひたれば (源氏の)
えしもふりすてがたくものうげなる御
けしきながらありへ給ふなめりといとほしう
見ゆるをり〳〵ありつるをまことにやん (真実ハ葵を源の)
ごとなくおもきかたはことにおもひきこえて

枯たる下草の中に
細 源氏宰相中将の立まに
給ふ也 大宮へまゐり給ひて
孟 式部卿勝之不見之十月
の頃なれど此花咲残りて今の
花なれば哀なれと
君がために咲けるなれば
とこ夜まで残りし也と 晩
師云 ひらきまてさくこと冬ま
ても花のおちる物也 弥生月
の花の類也
草かれの 孟 夕霧を葵乃
形見とよそへたり 秋来
此歌源氏の 葵は葵の上
なり しかれば夕霧も此なでし
こは夕霧なり 秋は葵の
事也
匂ひおとりてや 細 葵上
よりは劣りてこそ夕
霧をは思給らめと也 投哥
遣義 陽ふ武部卿の内府等の
御事也 むかしのとの給ふ
とぞ見 和泉式部
はしめ見て 比喩と云

給ふかすめりとゝりしるかゆは、いよ〳〵くち
おしう思ゆるにより、川よりけくひかう
をかしうありけるにつけても、くちをしう
うちさらぬ下草の中に、りんだう、なでしこ
などのさき出でたるを、をらせ給ひて、中将のた
ち給ひぬる後に、わか君の御めのとの宰相
の君して
源氏
草かれのまがきにのこるなでしこを
わかれし秋のかたみとぞみる にほひ
やおとりて御らんぜらるらんと、きこえ給へ
りげになに心なき御ゑみがほぞ、いみじう
うつくしき。宮は、ふく風につけてだに、木の葉よ

けよりもろき御なみだは、ましてとりあへ
給はず
大宮
いまもみてなか〳〵袖をくたすかな
かきほあれにしやまとなでしこ なほいみ
じうつれ〴〵なれば、あさがほの宮に、けふのあはれは
さりともみしり給ふらんと、おしはからるゝ御心
ばへなれば、くらきほどなれど、きこえ給ふ。た
えまとほけれど、さのものとなりにたる御
文なれば、とがなくて御らんぜさす。そらの
色したるからのかみに

らんこは脩りかんこは脩りかり 晩 夕霧は大宮の孫なれば葵上よりは彼にかへらんさりやう
木葉よりも 細 花鳥の発端吹毛の本草の此哥面白し 花後撰云家の祖をよりても
りや嵐吹藤の末葉の何よりも秋の夕暮それが名残の風よつなぎさへなん
ことよめる心也 源の氏者后よりも又源もらかしく
はなもとそ ささわ
まつかしは葵上のちなな
事也 細 細 孟 日
さまでしう 細 あかれのな
くさめにさみしくて参
の袖の表は此時無なるべ
かはしつうらのかるとぞ
かーつき人もなきる
さうらきをかれとのの
すらまつ 細 源より槿の
宮へ久しくむ脩給はれ
給いし 河 さのりのならる
とたらく おもしまとを
れしくはねくのるそはなき
かれとも文のかうしはあ
りつまなる処むかれ
さうしとがめんかすてまち

それハ治承をさまうしまへしの積ゑどうりしまりぬ中ハ久しくよりしもありあり〳〵しきりを
されど氏權の姫君ハつま道なき物くるしくのせくすがたにしこまりぬさ由よし絃
かと常にあをかりきのりのとハさらりあるりののよううりつかさうしのあいづくえつやと
おろかり
わきてこの　細　下の句權案
まうけていふうつれなくて
絃ならさし　師　氏房葵
の悲傷と權の姫きこえま
悲へまふづきるすまハわ
らねども　わり　悲傷され
されハ自然よをうとこ
りりうう氏　細　緒方月いつと
いつも阿取ハ　引方絃什り
阿取ハ　緒方月いつを阿取ハいつ
しりとりく紬のいつわり
ハまうかき
泣てあとの心をくめて
細　うとときさ内の方も一段と
くらいけてく筝絃し
みなくら山を　細　色よう文
の何ごと老方院大内山は
く內のうし　名称の眞斉
ろりふしえそハ真子ひ院
係
わきてこの葉こそ袖ハ露かくれ物おもふ秋
おのきとへぬれど　お係の方いとらうきよう　川を阿取てとしおりは
てかどの心とくめてくる絃へるつねよりもまく
と宮おりてむらしがうさき　細氏係老ハ中でいふ　絃からうとく權の方
をこさくしいつかしらを世間されくれハ北国　權もおうしく表よ云ひかへく　お係の
うら山をうひやりきえて　芸房て　こめりて赤きみるを云くえ　るのうしう氏やそ
やうく　おくのまかり
抜ぞうりよさちそれぬとくてしまう
しらうて空をいうともそ云えとのその月のをな　きう　五一筆そとわ
なすきづきまてしもひるしもめくしかすみ　そらしゑえ　係なて
大和るの大内山とさえおよおりしまでう内院中納言重輔物使つもり参りて白雲の九重
よまいて母らけれて大内山とむかへもいとのかうし絃しいるを出て今係氏の御まとりくこう
おかめらよしまりへうくの方つてうし比二段ハつれまそてうけくし　晴月秋抄に委
ゑあゝハきとく　細　色をうしハうりつうきうらり　もそのうくさつし思んをゑやハえ　ふかきうちハ中の
さのうあをきやりたれともくの中をいうらも今世絃げ云絃ともえ君せぬ　ゑんに　ありきし
秋さりてよ　細　葵上よとそれまかそし　師　方の心ハ係の葵よとそれたし　哭
より阿取らしわりもいうめて係の事くるの心んとえ心けりさ　係の方自害
と葵の悲傷のやうよ嘆く行れハ權のそれよとうあして表　おふく
なまよしらまつあふくも　ごよよつけてことしまうりいうてらこ崖な
細　係の名くさうこのまひと
をきよらで手絃し　云紫れ
是石かどいをられまる
あとし又四方のおりるを
下ま　細　なすつるらくし　時雨
つらくへしかれし
畢　權又ハ家蓮花のこと
とさらくの絃に係よつてき
人くをくれさうハこれら
まうそいんど　引方まそ
りかし　細　盃月おうあやま
くなりるそよ心のとあら係
のならせ秋氏
抵也へりうしまうそし　細　何集
きうの都く世界の是をふ
めり絃つくさひとしこそれハあこと　係よつてさくハなり　ねま
出たし絃人のれハ心ご海なりうれあらう　細　權ごゆきあせこく
ざらへこおかりしくしあそれとまくらく絃
まぬられまうらまよかなけもえそ　おひきし
川べきわざかれなけ紙ひ人ふうしすうまく
人めよう風ぞうらわうらハあやうらのあすん　係之　細　君上とハうらく出りえへのうし
をいでかけらさこの妃君とさきん物ふ

く給まことゝ人をあはれ
のあはく人やとぞあさに
てなとくせりしたる 弄 六帖集
おのえへのあらしゆけり
あつむる心
さめみやなるをみそ
世事の心也 細 源中最極
よきぬの御心とも也
いふらんと 細 紫上の心
は八段とおぼしめしつゝまゝ
ことゝ思の心やすき
也 弄 紫上はさま寒事
をよく教えんとなきな
き顕の事也
これそれはまへは 師 常よ
くゝき顕われとくわく
なう部して云し左大臣の
方にまでしたの詞也

したてじとおぼす。つれ/\にてこひし
と思ふらんかしと、わするゝおりなけれど。
たゞ女親なき子をおきたらん心ち
して、見ぬほどうしろめたく、いかゞ思
ふらんとおぼえぬぞ、心やすきわざなり
ける。くれはてぬれば、大殿油ちかく
まゐらせ給ひて、さるべきかぎりの人々御前
にて物語などせさせ給ふ。中納言の君と
いふは、年ごろしのびておぼしゝかど、この
御思ひのほどは、中々さやうなる
すぢにもかけ給はず。あはれなる御心かなと
見たてまつる。おほかたにはなつかしう
うちかたらひ給ひて、

かう此日比はありしよりけに
師 葵のせその世よりまきたる
てば服の初しえしうしねは
源の家がちてしく
みわたして 細 これまのを
なれそひはれてなされ是ハ是
しからんや
此義そ世り
えもつねまでならば此ね也
かつま事へをつかはり
いくらなれそ 弄 まず
られ女房達のことを申也
哀ける久しそ思ひなさき
かゞしけるゞ又源のうく
の事よいふく同じ儀
也
あ給なるさ御よ 細 今よ
りハ源の御事も何たかのあ
るへきの心也 細 源の詞也
あくかれハ はかそでまやうよるさを
心あさくも 師 名
あそのの事也

細 源の詞
かう此日比ありしよりけにたれも/\
まぎるゝかたなく見なれ/\て、えしもつ
ねにかゝらずは恋しからじや。いみじき事を
ばさる物にて、たゞうち思ひめぐら
すこそ、たへがたき事おほかりけれとのた
まへば、いとゞみな泣きて、いふかひなき御事は
たゞかきくらす心ちし侍るは、さるも
のにて、名残なきさまにあくがれはて
させ給はんほど思ひ給ふるこそと、聞えもや
らず。あはれと見わたし給ひて、名残なくはいか
ゞは。心あさくもとりなし給ふかな。心ながき
人だにあらば、見はて給ひなん物を。

らなうこ人〈細〉葵の此しもせむとても陪思して云つゝ人ぶまにおゝバわづらはしくならくしうね
とハこゝろえてんとも
命をもそうかゞれとて
ちうよし孟まハ死ぬ上たゞやすくそ思ふ人々ありたしあり
院の上臺よ以名あり
老くし〈河〉裳日記よ上東門
あそき一〈孟〉葵の喪女之あそ
おるうきおとめ〈細〉狩衣き
とかいふれよりし立忌
の服し心喪よてさく〈細〉服着の間
くいざうもゝ
多く花をきよそてくり
〈弄〉薹葉又ハ橡よ色て大略
ちうとなむひハをわうに
どうきをいれくそむろよ
しみさうふうき給ぶまゝハ
ちと黄色のまじれるし

〈細哢〉門まなし〈おゝ〉命ゝまくてよりあのまゝハ何ぞ別のうらうつ
くらみ多くそあまたらりあり
ちうよれとそ大とうらなしあ給へ〈葵の上〉まよ
このうちぬれまつる凋どそめで〈細 西白ゝさ海とえうくぶてくし〉ききぞ
わうそてらしうさく長給しらハさわりハ〈細 葵上のつひやむひゆてきゝ〉
〈主かさ心ひ臺之〉〈葵のうちあれてくし〉
のかや大まちくいと心消そげよ也へ云
とかりよろ給てあそきハ今ハ我とて〈源と葵と思〉
てそうんさ人かあれとのまへバいうくな〈源預し〉〈あそきのさ海く〉
くゞ給ちきわとめへらいくろくそめて
〈てむくきそをさく〉〈童の装束〉
〈河〉黒キ汗衫〈かざみ〉
くろきくいざうひろの御衣を
きうつもかうし深かうり胄とてれさ〈をもき〉〈ね〉
らん人ハつ事でとのひても〈湛思し〉〈細 源の御心〉
〈細〉夕霧方し　おゝさるきこ人

うゝ世の名おゝ〈葵の附け名〉
あもうくよのゝちくまハ
え建る事ゝて
こまぶぁねハへたり　当人ゝ
そ又堪忍まへさるよ涙之
そやいとくし
〈細〉なげきしの給ふも宣ぶ
ましくし何の世ハ立
入給へさうすもうとまむき
ひとし
又まうとにおのれるゐり
くまへとき〈実〉よ葵の多
こゝとならるへき装束闕参
おどわうしう死え給に
うつろうしよハおろてかる
あふし心れ義なり
えへらくてのこ
おゝ源のもしもそでおゝなのさ
御く遠相まらられ
あらい四十九日に比ふさよ

をこそそのまへにし世の御ゆかりなく〈源氏のうちうちさもわく〉
人ぐまくんれるかごりざかぎもきうらぬ
べくなんするぐられふおぼうくべきことも
よのうさへどいぞやいとく給ぶとそ娘給〈葵の女房之のそ〉〈源氏のし〉
かんとおぼいかくらゆ月ちし大殿ハ人でよ〈細 遺れる事くらうくさし〉
さぞゆくゆとさりぬる〈おゝ今まり夕霧の事と〉
てあそびわどもえむとようのけりてあゝ
べきかなしわざとすぬさ海よぞりぬ〈孟〉
けりぬれうらせ給くれ思ハくてのこ
もいぞうはつくしもう給ちんやそ〈源氏し〉
院へまいつ給。車さし出て、こぼんなし〈米〉〈帝臣の公とし〉
まつり御とけりのあまかそうわまゝるで〈細 此所挿給へ孟日師　義なる所と〉

まうし滞ありつる神とも
細 日数も定めて進歎も
御ひまありつるよと源の
御絵おし其の結おきありつ
かうる宗の事文感情
かうさ神く出便公とつ
其てみるへしとく呼出
吋の挨思やらん十九
日なし見るくもう歌の
源おりやなるよと源氏
本の御絵おりかの表
いかにわさしくねたさ御
ゐへ 正日
こして 二条の陰そ
源ぜまうんとく源の内侍
まえまうるぬんくとなり
おうての事一段とひしく
なるへしとうろへし
宗ふしも 孟 くよふとる
さうがくし 細 おみうち
くみとりハ富を上ハ経
みへくるみるわりされ
とみしおうるよともわう
人このゆ中とんへし

進らせこそて本のことろふ風めかしくて
ろうちもひさうよ地へよそめて梅人て
ものいはぐくの傾そくてむそうしひまありつる
神ぢらこう阿ひまうりぬまうりそやうて
二条院よとまりあくしてまうらひ出
人ぐもつこそてまらうてんとやまうぐ
ことのくさら出つよそふゆしもとおぼし
おぼさしとすれどまうすくりのがるし
地ぐどこもよふのしこさよもうる気しも
さあしさあそて地ほさら宗の作氣よおせう
そて出してまうり院よおほつるようりの絵
たまよりつそよなんまつり給ふめうさ

宗さぜん出も出くよ
作の事之源の出し
ころうりてせひのをと
しわしふうくたれハ人
ころこしくて

海よ出侍よ何そとはへまそる
くしへ侍よけりとどうぐらなりのを
うごきてかん中のしませんも出くよ絵べ
それハぞるさふもまうり侍ぬとおれば
いうど出てすめハめとうし絵つどもいうり
ていほりをえまてしもつす地ぐそや
かそわくらのゆるふしてくげよ地ほしそ
はね袖も出さるすら結つぎてうそてまうる
んぐもいとくすしあるのまさは出と地ほ
しけぐらうしいとさ海でしそなうさ結
さ海わられようろゆうさ地りしいへく
さ海うく宮海めさおうり地ぐひさう

よりひのつまりよ八さしを
おもしろき 細 中将の詞也
師大将の子まで大臣の
坊ハ源氏つききよ葵の上
備よまて御子まうさけり
こ坊に院まこるよこ
とわりみと哀みも書
すなり

さやかにひてもきこゆるひの川かうかはさ
しとおもぶきことよ川かそぞよ、源
わかわざよ給ふと、まして ひつるる
ら世ひさまへそしられ給ふ。人々をえのど
め給ひねバひかりといくうがりく
なしもうき御よ給ふべくれバ法だゞるよ
をえまり給ひねかりくしのつるそ
みはさやうよ中将もしけりうききせまへ
いうがくも給ふまじき光の末よ、中将
られうかつらくも給ふるのしきのそせ
ひき川わくの給ふ乳色いとようなし
さらきよびくろみおりそてどくれさん

ざ川源氏のさぶめかきさハ世のさうぶとく給
へもりすくもうめもりて中将く給なりま
どひハしみひあうまじなれわざよすへ院よ
ともうち給葵し給ふんよ、どもうのせ給
でれしうえし給ちらうバ河内も
ひまうく
給め給萱ぬ源氏ふしそのしらく
え給ふらくまもし給ふよれ、本性のし
ん藤よのわるこなどのあけくとりよう
うぢよ女房中人ぐるりとらりてごさ
うもれめひかどもとうらられバいうぢ
かな中将そげよてうら中将られつおわ
つまりふる給ふとく哀とこの中将をもろ

細 世のおさく孟 愍
細 帝のれんをそかり ての源の
左大臣の御
源氏のく
細 あつまりちうし
きうじ
ときちかう
あわれ
左大臣詞也
河海集

さしあたりてゆかし
服帯よあるまよ八世の事
ひとしハ世ひるされぬる事も
となり
源みとし 帯よさやうの花も
むさきそうせさせ史と大臣
の部のひしよろ事そらく
給ひハ河内も 孟 源のおぼえ
よし世へハこうきよわそぞ
のしおふ女方の分みくて
かくうらや 細 しに中将の
けんれに給ふと源とそしめ
てえおひさきのかきぶべき
とうしはよの給ふもの人
ふるき給さ 帥 ひまる
ふらず 中すれハ時また
といふく
細 中将くの詞也女房の是
花ちるまじき
葬 女房とらよ出わせそ
給名ひしと其ふかなる
し

よとよりよ始り
源の今日かきよせとうちり
のやうまと云ひ居まうこと
ちとげかハしまみす
細 源ハ葵上の方ぶ方よ行と
けてまりまかんとハすり
しと 孟 源と葵とのあい
さく
さんともつるよハ 細 やうに
ていろかよしこともしのを
云ひし所あひ分のとハつ
いまこしんと云ひまうれ
むかし一段にてハらいるきる
をとのうらく
けよこそんかそこさ
細 今ましいよく思ひそ
きうしか 各やしく謙

おじさんをしまちゝれバさりともと
のつゐくるハ走(はち)しせ給ふやなどと有
ぐさめ侍り給ふへくもおぼひやりなき事（大臣のんよいそ）
女房なども云ふを源よ始り捨つる思（わらづら）
とおりひく浜へみく皆々別ぬるれし（細 葵上よく これ）
ひろきとくばずくなんれつくまつる鋪（源よ侍へし）
月の名残なりんへ給ふげさ侍らめる（女房なまのし）
かくとうらなるらとけむしまれ
ことハ侍らざりつれとさらともそつるにハ
とあいそかの事志侍りつ給けるこそくむ
げそ云ゆゑ入よ侍れとても又なき給（右内侍之）
ぬ。やしわきたうろのうんでのるけきよ（孟 源の忍葵て）

よなりてきくへそくく
とつきよりうちとも と
抄 大臣も葵の御もの時
源の給ふをありしをと
のすがた源も又降しら
物し源の葵の上の詞也
よいりしあるくかし
すとくく
まく今ハ何と称えてか
細 葵上の御なきハ中の
のらそしとえもありと
ふき 孟 弁はく
雪隊のむかしきんらそ
細 葵上も共給源も今か
まふ秘ハ源のあわけのこ
とし。 弁孟日
はきへてて 細 かれの
あまりなりまで無備
し給ときと

を給なりれ。おとゞはいみじくなきて。のど（左大臣との文）
まさるひのまへつゆどいのいかられめ
みゝゆらと給つらんを。中々今ハなるを（今参らむ）
よのそらゆきつき侍らん。今めらんど（源とく）
てんそいぞすく侍。わくをとうらゆくの給（源の給ひも人も）（左大臣とく）
て入すへまゝ涙云川しひもうびゝあり（まめ河よりくねし）（葵の衣）
はなりくるともやそれど。霊嫁のむか（うつきく）
しきんらぞ志すふ。天下のまへよれとぐ（左大臣のさ御）
てなどらゆしてまするひもそ（細 源也）
まゐるとうてめ給志かりつきほふを。（左大臣の之）
わきんぞえるすき中々も涙しむ（よろこひの女右の御之）
をおゝくし。義なりかうつゞもさかうしく嫁（唐錦文之）

なき枕うき衾と白
細 文集第十二 長恨歌
鴛鴦瓦冷霜華重 旧枕故衾誰与共 悲日
長恨歌 唐本ニハ多分
翡翠衾寒誰与共とあり
あり旧枕古衾とあり
和本ノ説にはやはりつゝ
す 又云古文真宝所載
翡翠衾寒誰与共
白氏文集第十二唐本とし
勘如旧枕古衾誰与共
なれ源氏心也 永正七七十二記之
なきたまぞ 弄 源氏の此歌を
あはれがりし 細 源の
よ亡魂をとふらふ 細 源の
心の切なる言よりいへる源の
ゐんのかたより思ひを

やまとのもかきけがしつゝさうにもまなにも
さま〴〵めづらしきさまにかきまぜ給
へり。かしこの御手やとそらをあふぎてなが
め給ふ。よそ人にみたてまつりなさんがをし
きなるべし。ふるき枕ふるきふすまたれと
ともにかとある所に
源氏 なきたまぞいとゞかなしきねし床のあく
がれがたき心ならひに又霜の花しろしとあ
る所に
源氏 君なくてちりつもりぬるとこなつの露
うちはらひいくよねぬらん。一日の花な
るべし。かれてまじれり。宮に御らんぜさせ

声をきゝてわりなくおもひ給へるとかなしき床の
あらて 細 と衣と床に月なく
文集の二句を引きて
あらはれ長恨歌
ひとへにあはれなり 細 上の句
けり 弄 孟日
ふかひなきことをとは
細 葵上のことは
あはれなる
とて
よき

このたびのことは
細 源をもその
作りなし

まづいふかひなきことをばさるものにて、かゝ
るかなしきたぐひ世になくやはとおもひな
しつゝ、ちぎりながからでかく心をまどはす
べくてこそはありけめとかへりてはつらく
さきの世をおもひやりつゝなんさまし侍る
をたゞひごろにそへて恋しさのたへがたき
と、この大将のきみのいまはとよそになり
給はんなん、あかずいみじくおもひ給へらるゝ。
ひとゝせ

さしらぬさへきゝ
およ女房廿人ばかり
とうりてとをり

殿の御かたのまへをとをり
細 御かたはらへいらせ給へと
まはりまゐれとて御かた
せちなし 又ハ殿とりすを
源ニ見るべき事さへ
とえ様を初め見ゆるも
人々にのありけるや
御目かそうなりぬ

ぐゐのびんむねつくらひ給ひしと鈴久乃（源の玄一経）
ひかりしすひてはいでゝおもひおはへりん（のぞれなる事なし）
と、御中をもええのひかたへさまさるでさき（夕顔の）
まよ御ゆきへなるゆきわれしきたへなむだい
とらほしうそでさしうらなきことうぞそぞろ
さもさ、久のかのほかにちりかきたへでこ常
よもなれねつくよの中とちかられなりてと
ぞをしらぬうひでよのゆかりの給へ（源ち夕顔の事の友従）
ものやうよ、若君とらさてありてこそ（うち ぐさこ 夕顔の）
いかでさもりがめれとおほしける、いともふか（夕霧は唐人ハえ）
さ、伺かのはなさるは、なそとてとのくお（夕霧きく）
しうを見ねまっでまゐりんとのふよあれ（細 女房なとの云し 源 葵の前退おもく成）

流へまゐり 扮を流素
おかへさうを言ひもと
流るその御を云之

倉姫のむして
細 中宮の御方よりまし
きうく作あるく
つれなき世 細 源の御ゝ
御に中宮よりもれよう
ひのきうしみくさり

だらでゆくよりかれおりむねのかだく（とあさとしらのみく）
あるれなるこゝとゆほうら、浣へまゐり（細 源の浣素あるく）
まゐれば、いとくゆりやせまたうさ道（浣の北の方 糖さの）
けそ、思ひふかけめやとこぶらうふしお
よゆかりめてゆきへるそのみどまつる（源まし）
せめてやうやとゆかりあかりのひかるさせ（きく）
まくるさ源義よりてげむかし、中宮の御さ（ゆかれ 細 おろう分のうく）
よまかりまへればらでめぐりうらそ
まう、倉姫のむしてゆりひつきをねこにど（おほえ分の何の同ゝ葵の）
も後宿かりよつかそをいかふと御やうそ（いよ源の拙傷ありしく）
こゝろして、まうり、つれなき世に、おほさすも（源の花か何ゝ）
やふまへ思ひゆしとめよらくに給はりま。

なかすでにいそ
細 此何典云之なからん歟
あいかんとみくり
師同
うへぬおんよるおり
師 常ほさん着蚕へハ源の
人よ進あれハ蓑のまなよ
とりそへて給袖をぬう
しようく
せりんのうへの御ぞ
也 花 無紋袍ハ裏穀なき
綾 冬ハ常ノ袍のくらし冠
も無紋ハ巻纓服なれさ
うれるいそくらき之勝
師 同云 無文の冠其後ゆ
一巻書の冠ハ無文羅之
服者ハ無文の羅を用之
孟同
されどく らくさけ
さうじ 師 源氏の御ふく
くろ不とみ給よつけ
ても蓑上の方にとまり
しのかとおやり給之

いとゞたぐひなくおもひつゞけらるゝにも。
さびしくの御ぞうつくしきかずさめ給そらん
なかすでもとそてさぬかりぎにあら此着
しきとりそへていとしらぐうしげなり。
ひりんのうへの御ぞよ。みびくの御ぞかざき
ねえいまさしそへるやつれもかごとも
やがるれいまそひらをかに御めりさ御
まゐまつり、まひもひそうまつりぬ
見たるすこしおしはすて給ひけく
ぞまゐぞ給二条院よいとさくつしひみ
がくそ、ゆくとんみ給ゆのしうらどらう
たえられまうのがりてられもくとそう

ののまへらしりうつ
細 蓑上方の女房達のまで
ありしそまく
れさうそくなりし
細 花鳥云三ヶ月の服られ
八月より十月までハとしハ
除服し給へるしとく
公家也行除服ハこれより
給かりしも色ハ只給へ
あり給し衣裳を着改
めあたりし
花 人の御衣がへひ
河 十月更衣の御装束之
師 葉の方の所とも更衣之
しうる歟なり
少納言なりそかし
細 ちゝの衣がへなし
くりともさ西なく少納言
給御信衣つくと源の君れ
もし

ぞ、けざやかなるをまよつけてもかう
のみまさらむしじうつか鈍色ど、めぞ。
衣よえひおもしれ給、けうぞくどなり
人へてかしのきいうよかへまつり衣がへ乃
れ古つひくりのすくわたやゆるえそて。
こきわろへむりべなりすぎこゆやすく
とくのえて少納言がりそなしん給そこぬ
ころくろめくしとこまふ姫君いと
うけうつきうくろひくかうす。ひとし
かうつらぎよ、いとこよなうしそとも
うびまよくれとそらいさうき御ふ俄ひさあ
げくらしそもうらまへべうらそばえて

まづことくさ　細 二三尊
の御方の對をとりかへし
うちやすまひてまかりや　孟
今えもいはずしてそのま
つらくなれいでとりうやや
今よりはつねよ源發
紫の方まとこへ〳〵もく
御とれへなれいなりく
いとうしろもうやかに
んとしかやりし　地よの
くゐすしのこそ　地とせて
のまへる御かへし

ちゞにひまよへるけしき御あはれなる心ぐるし
けのれるにこゝろめりしらけりとたのもしげなり
のみつくし世のゆめ人の心御心ならずも心ぐるし
くもなりぬるれとこゝろよりいでられしかば
くるりまて地獄つみふりつゝ御心のうちにも
さりとてもてしますてひとつの物語のどもれ
うこてよ人しられとゝまくしくう地にもえへ
世にはなしくてとゝまるやうしくひてまうり
らん今えもいでてもてそすまうへなれは
いとけうさくや地やさしれんとうてひさ
こしまとも御納言にはれしとうてのひら
なをおやうくそひ地すまやんとなさき

かゝるかりやさしくもなからんかり
葵の後は又きとくあらまほしき巻
やさしかりきさんとさか紫
上と葵上のことゝ紫のかり
心をとゝまりける敷之
中ねの君とゝふ時
細 源氏の方に支女之　解非
よりて東の對にそれ
かしこしきまろく

みけるしね　かくる
かやうにもかくる
きんの　師 案今十四巻
くらりかへし

のびやかにしつかにひきかへればいとゞ
づゝつしきや、さしうちうち御心ざしとおぼしめせ
めくさんなる、わづれうするよらきまつそ中
ねの君といふよれはあいなしあうはさうひ
てまたいのごりぬ。あはさらはなうざえ乃
けりとみれは文しそてまうり給、猿なる心をを
又ちふみもつきとねころとのこなん、いと
つまくよなどあらかれどかなるよりさる
あらはも捐うくゆびしめて覚しとくれど、
ひめ君のなをふぐしこそめくまゐらしう　とく
のひえそくいとめでたくいのことみえしまたげ
ならしぬ猶よりさこれしまつれば　魚魯めき

碁うちへんつぎ
五篇変 篇旁 篇を
かくし勝負はもろこし
反養老人は漢の篇つき
とハ何篇の字ふくを
書の中よりそくやく出し
付る数を勝負とする
なり
なかしるすらう年月
師栄のなさまつき給ハ男女
のたハ此がしらちよう
かくしおまぬのくちひ
のふりともき給ハ出され
きとのまらいりこあひ
しくそのひらくとハ男
女のくちひわるべき比と
源のそふく
人のくぢめ お 新枕志まひ
しるすいうゝるべきよすゑ
らぬこつねよむつ道路
ふりゆへし
ゆき給ひぬわさかり
お定ハ新枕の此のまえ
師氏相源の二条院へかへり

ぢんさうつしとなすにゆりくさへてうろうさ
まんとみをもちひ給をぬけしきたちつれ
ぐわうあしくはあらず よて碁うち
へんつぎなどし給つ 日ぐらし給まひろ
がんのらうらくもやうあひなつかしさ
さまうれだとの中みよもりつきまさらじを
たのぞ多へしげりしくすらうろ年月こ
そ、まづさうりうこのらくてあらはありつれ
志のびてくやちうてもひゐりしなれどもいどあ
つまん人のうとめうそてまうちらくべき
はかなとあしぬよ程こ花へしく出ふ給
て女君へさしうまゐら給つぬあしえり

ちふて旅をへてのよちく
うくつり
かはの給と 花 文とむき
呼にむくて年春小別在事
しまてやぎるんて 加旨
あひなくも
てとをさまくるしふのつぞて 細 源の言給
おひや。まくりとそうな
お又なる何としてひま
ならうしまし 抄字云 内容
くハうつくさうくいゝ 祢く
よう別ーかどとく 師今
と新枕もせずつるまひ
かうとゑそまつるうろ
かうれん此うちゐんとれ
孟源のゐやうの仏ちんとハ
やりぬと紫のんし 御新枕
のさ侮るひのかよとうて
きさらきさ侮たるなし

人々はいかでかうちすみかくれこそ
らの道いさうし此月さうしめやとこうそそ
まうかけくよき人はもしらぬ給らく
此枕の給とも桃のふらよさりけれて此よし
まうら人まもようくしてりしらぬげ
まつるよ、わきましきひとう文此枕のうへ
あかたまんかりうくきさあけてこのへぞ
源 おもやかくも海ゆうれ給さねさもぞが
よみれし中の衣ともにとさこひるつるや
うならうられ心ゆくもちんとハうけゐを
ながうちさとしりぞかぞしそひゝんさうり
きうれんをとらろくしのり さ搦よ思ひ

なやましげにし給ふらんは
孟 紫をうへのひよわらせ
ものへの御心ちのなやましく
しきりなり
なふ碁もうつまじく
しや おゝ碁うち遊
んつきすなしつまあり
前尾なり

抄 衾 ふすま
花鳥 ふすまを衾と紅
なり。今衾ともいふ四角
四面也中にわたいれたる
しの细なり。女は入内の
夜女房の御母ぞあつかり
給ふ

かゝる御ありさま
抄 ゆるせ給はぬをそゝし
わらひたまふ
いきさりげ うちゆるとなき
なかるへし

亥の子もちゐ
河海 群忌隆集曰十月亥日作餅食之使人無病
掌中暦曰亥子餅七種粉大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖
くれ〳〵ひのかりなんは
孟 紫上のことよけてえ

こえけんと。あさましう思さる。ひる
つかたわたり給ひて。なやましげにし給
ふらんは。いかなる御心ちぞ。けふはごも
うたで。さう〴〵しやとて。のぞき給へば。いよ〳〵
御ぞひきかづきてふし給へり。人々はしぞ
きつゝさぶらへば。よりたまひて。などかくいぶせき
御もてなしぞ。思ひのほかに心うくこそ
おはしけれな。人もいかにあやしとおもふらん
とて。御ふすまをひきやり給へれば。あせにおしひ
たして。ひたひがみもいたうぬれ給へり。あな
うたて。これはいとゆゝしきわざぞよとて
よろづにこしらへきこえ給へど。まことに
いとつらしとおぼいて。つゆの御いらへも
したまはず。よし〳〵さらに見えたてまつらじ
いとはづかしやなどゑんじ給ひて。御すゞり
あけて見給へど。ものもなければ。わかの御
ありさまやと。らうたく見たてまつり
給ひて。日ひと日いりゐてなぐさめきこえ
給へど。とけがたき御けしき。いとゞらうたげ
なり。そのよさり。ゐのこもちゐまいらせ
たり。かゝる御思ひのほどなれば。ことごと
しきさまにはあらで。こなたばかりに。をかしげ
なるひわりごなどばかりを。いろ〳〵にて
まいれるを見給ひて。君。南の方に出給ひて。惟光

うらどくふをあらで
河 亥の子の餅ハ三ケ三や。
ば新くよハわれてと云く
名いまくしき
細 南庵のまゝうりしよ
のわれあるくし亥の日ハ
亥日なれハこし
ばよあふみ三つのはじめハ日
なりして
細 是も惟光より参るや
やいましい三日との給へ
しとうけるくし か 愛敬
妙之惟光新枕の心といひ
つゝぬ
三ヵ所ひるける 細 三ケの字すら
の一ツなり 眠 三ツ一ツ二ツも
とくじ説あつと云く呂佐
別よあり 花嫁聟の三
日よあたる夜餅と称が
こまゆえるハ悠ハよろし
ぬるし八の祝せるまぜ
係よ光餅と依るるらず

とめしてこのわりらぬ、うちうちぞくはらこ
ろきき餅かはわらで、おとさのくれなり
まづらせよ、そふそいまくしき日なり
きりしらば、忌々そのまみいは気色
とくらも物めてふしさひはらぬ、惟光
しうらふもうけ給ひてけるよあひぎ
やうれえりじめへ、日えうりさくころしめそ
でさしとふてそさてもねのくこいハ、それ
つうはらもぞべう伝はんとまめがち
てやきべうりかきとりかめそしきあらんか
しとのまみよ、んくなくてすらぬ、うの
かれのさ海やと気ハぬかさて人ふもい

新枕で云とゆうりされよう
男へ帰りまし、かれバ儀老同穴の契とちりけてとてとえ文字も帰の字を用ふる
ハ女ハ夫の家と我家と思ふへきゆへ、さく餅と用もつる男のかしふそ分をえらん
ら分けり嫁娶の日まうき衣裳なども也
んよめへるハおやまれるきや秘伝まく別よあるべし
みえうそく 細 惟光がやそく
人のらしろうそかる哉い
かれ 孟 蔑に別て今ハ
家よろうと之 か 新枕の
ころも家を類ひ多く
せずか今ハ一夜も侮文す
のわうあさをいふくなり
よと文ひのましうると
我はんよ源の心知の事也
師 か の傍よ曰
乎ひていうう夜ありて
か 惟光乎ひすつると云ひ
て夜乎して、祝美こん餅を
あるんく

まぞ、はづろくいふだらり、さしまぞつく
まひすらもり、気ハこうらん、儀あそ、いまそ
じめてぬるとりてこてつらん人のうら
そろも、いとゆりさて、年比おもれとら
つうふるさつしめとおわしぶりそうら人のくらそ
うしそあるれいすれ、今ハひと夜もへぞえん
くとのうりるうるべきしくばさうの海
ひしうらぬ、乎びていくう夜わしてりそま
いまらか納云ハ地となかしらそえげりしうやゆか

かうこのはこ 河 香壺匣 或ハ香粉匣 香壺の箱ハさしもなきものなれど、諸の香を入る器也 師 梅が枝の巻よりくはしき事ハ一段こゝにはいはず、三日夜の餅を何となくてまゐらせんとの心なり

まことにいまはさるもじ 細 忌事よき詞に今はいまはしきもじをいませよといふ也 あだなることをいはゞ忌むべきことなれば、かくいふ也 文意は別の詞なるべし

わかき人にて おかしき 弁か惟光か妹也 惟光のよそへて、かの弁にいはせし也 或説 弁ハ惟光の妹也といへども、さうしのうへにては、ただかくいふ斗也

さんと思ひやりふかく心しらひて、むすめの弁といふをよびいでて、これしのびてまいらせ給へとて、かうごのはこをひとつさしいれたり。たしかに御まくらがみにまいらすべきいはひのものに侍る。あなかしこ、あだにな、といへば、あやしとおもへど、あだなることはまだならはぬものを、とてとれば、まことにいまはさるもじいませ給へよ。よもまじり侍らじ、といふ。わかき人にて、けしきもえふかくおもひよらねば、もてまいりて、御まくらがみの御き丁よりさしいれたるを、君ぞれいのきこえしらせ給ふらんかし。人はえしらぬに、つとめて

君ぞ例のきこえしらせ 抄 源の紫にいはひの餅の事をきこえしらせ給ふべしと也 例のとハ何事も源のよく教へ給ふ故也

少納言ハいとかうしもやとハ 抄 嫁娶なとの差別もなくいつとなくおはしまさんと思ひしに、かやうの所までもよくおぼしめぐらし、はなやかにもてなし給ふ事を、うれしく思ふ心の涙なり

さてもうちうちに 細 少納言がいふ詞也 師 かくとしのびやかにもしらせ給はゞよかりしを、とかこちたる心也 惟光がこと思ふらんと少納言思ひやる也

此はこをまかでさせ給へるにぞ、したしきかぎりの人々、おもひあはすることどもありける。御さらどもなど、いつのまにかしいでけん。けそくいときよらにして、もちゐのさまもことさらび、いとをかしうとゝのへたり。少納言は、いとかうしもやとこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、おぼしいたらぬことなき御心ばへを、まづうちなかれぬ。さても、うちうちにのたまはせよな。かの人もいかに思ひつらん、とさゝめきあへり。かくてのちは、うちにも院にも、あからさまにまいり給へるほどだに

あねさまへの　阿古紫
のわけ捨ともきこそめて
初ともつぶさんのくらう
さくよ　お紫とおも岩紫
よませて　いろ式文を自
給と面白し
源しぞよの
細　勝月かへ葵上をうくを
さまかしくつりにいとお
ぐハ岩ひ給へども、こゝろ
殿ハさまをひらり給ねこ
光勝月殿の内侍局乃
よくみろし、お殿ハ内藤
寮の御陣服をくし武縁
もこ床くそろべき奈良の
女のからき織なり

ちゞんすくやりげよ逃しぐれハ、おゝやしの
らやとみれおじしぶぼさうりひまし雨を
まりつくろめげよみどろいしろさへおひ
ほどもれいとかしとおぼせもあれど、
「おねさまへのんぐりしくそ、秋と猫
ちんとおがりぞうしうろれハ、いと堪らくて、
あやましげよのこりそでおしまして、世中乃
いとうくお得ゆりほどもぐりてうん。人心も
としまんさとのこいへまつもそうし給。
細弘徽殿之
いまこうれハこうしげよの、お紙ぞの名
葵上之
よのここムつけまへ多とげよもろきがき、
やんどとなりつかさもらせすひわうと。

あさくもくぢよ君ろかし
孟　うちみそハわん心ろせを
ひかくしお貞づくへをとも
給定うくぐるぎ君そく
おしらほしこて源をせて
とかりを猫よりうそ
内へむさらんろをおかし
くげきもこし

くてせひさごまうらん
お紫の上りて定ま
らんとみり
人のうらもおしまずらり
源の好色みそあそぶこんひ
人ようづくひのよゆへ
人の恋こともかのて葵
上のこころのぐひを
かんハ今ハ好色をとて
しこて人のうろこともおね
やうよせんとのんく世の

まてもおゝんよ。かじとうくうおしうらんを
弘徽殿之
せいおやくの給よ。いとよくしとひそかし
まそ。えばん人もおさくとしくざよ君ろの
よゆへくハかじとうおりしんとまつくせ
まそおうんことおがりぐけむ。気ひもと
勝月之
しむべてのさ海ゆはおかしざうしとくらおし
とおがをどしそ。今いとさ海よわく分れんを
葵上の遊戯より
すくておもよりハりそらうそしうくめ世よく
でせひさごまうるん。人のうしこともおか尽
りろうしいつくおやくしおりくらり
よろう波は鬼形ハいとくおりれど、海て
とのよるべとよのこゝろそん女はかるなく

人はいましめの心あるべし
し
こゝろのやくそく
如何とのことは不足ハ袖ひ
合語べきんだせぬでへうら
しらずとひ給く

その人ともうらみてぬ
紫上の俗姓をしらぬ者は
推けうく人のはなんとく

しらたらえ何よ
おもこら紫の心ほとう
とくしくすいんをい
のてくり

こゝろをとれぬべしとしずなのやうまで
そもぐし給ふべきれうよりの
さまにしおもひすらんそいかにんかでさけ
ぐよしのかたに世にしらすさびこの姫
君をいかりて世人もその人ともよりさ
こしぬよりのげすきやうなうらく見えり
まいらせたまひしてらんと思ひけりてれの
裏書 の人よかやのくハの給をそねべきな
べてすゝぬさ給よ見てなうくれなく
いまだいひとおもひぐさりれど女君ハこまて
うらしさとまてもしのびよう
をきそくてはりいしくりそれ

さやうよもえあつせまうて
御所よ圓もて合せ給
てみたら

りれなすうぬ
細 みりのすゝる花の小野
のなら紫のかれハゆきう
てまださせられる

さましらくかたり出れとやきつの御門
してぞやうかもえのくせなり給つぐさと
えさつかれ給をくうしうわうなさきの
よ思ひしそばされくおもしかもおとへ
なり見へるはあらさ御ゐとかしうとのそれ
しうをはばされくそづらやひさそと
し候いなくかれハまさしぬけ気色のこて
ろうさしとくしくと思て給浦ゝよ出も
まよかりきて 細明
くりぬばのきらの日ハ御の流よまゐり
給くぞさら事見なじみもまうり給そ
出より大殿よ中そてすつり地くおもてし
き年ともいそぐむしの行幸大やかしぞ

いとうちまもりて [illegible]
抄 源のおもしろうよ [illegible]
く、便されさうし

源氏も大将殿の前より出てうしき葵上のかたしちゝ [illegible]
まいりて [illegible]
かくひかりよ
抄 花をまもるよ八あまたがらふと
おりて花葉のえさうれ
なりとおり

みぞかけ 細 御衣架也 衣架
也 明 礼記内則男女不
同椸枷 注云 椸 此謂衣
架 河 椸架 延喜式 御衣
架也

給て、さうざうしくかなしとおぼすに、いとゞかう
さへわたり給へるにつけて、ねんじかへし給
へど、たへがたうおぼしたり。御としのくはゝる（抄 源の御かたちこしく見まさりて）
けにや、ものものしきけさへそひ給ひて、ありし
よりけにきよらにみえ給ふ。たちいでゝ御かたに入
給へれば、人々もめづらしうみたてまつりて（年ごろよりみえ給ふ義也 抄 夕霧也こと二歳）
て、しのびあへず。わか君みたてまつり給へば、こよ
なうおよすけて、わらひがちにおはするも（夕霧）
あはれなり。まみくちつき、たゞ春宮の御おなじ
さまなれば、人もこそみたてまつりとがむれとみ給ふ（葵上のかたみに付ての心也）
御しつらひなどもかはらず、御ぞかけの

中くだりすくまひ [illegible]
源のおほせ [illegible]
と侍しうちとく
抄 源の装束と大宮よりの年
比まで [illegible]
細 [illegible]
を脈八 [illegible] 師色
[illegible]

葵上の衣架の
源の衣架よりかはる
御さうぞくなど、れいのやうにしかけられたるに、女のがならばぬこそ、はえなくさう
ざうしけれ。宮の御（細 是より大宮よりの御消息也）
せうそこにて、けふはいみじく思ひ給へしのぶる
をかくわたらせ給へるになん、なかなかなど
きこえ給ひて、むかしにならひ侍りにける御よそひ
も月ごろはいとゞ涙にきりふたがりて、色あひ（五 大宮の異中の御事）
なく御らんぜられ侍らんと思ひ給ふれど、けふ
ばかりは猶やつれさせ給へとて、いみじくし
つくし給へるもの、またかさねてたてまつれ給へり
かならずけふたてまつるべきとおぼしける御した
がさねは、いろもおりざまも世のつねならず、心（抄 衣架よかけ）
ことなるを、かひなくやはとてきかへ給ふ。

そのまゝて今宵の御装束
ともきこへませう
まやうおかうとも
くらやうらもちとし何かわ 細 源の詞
くらしくわつうらしハりさ
せのまやうわかと香ぞ嗜
咲出哥お菊さうたえしじ
祝のらどのまへことは只差
の旅は兄も山かへせんのん
御そうもわかるへのら
わかうらし 細 よの白装之
去年にハうりさうりし
わうらしこ 細 今宵の哥之
表構面よハ兎角して如く
いつとらく素上のる哉とへに
わか中にお 年の時のうる志
うしまうす阿のこそらう
ろらわらへの上とこつけて
下に養のらわり
とうかうくべきうまてそ
歪まるる伏し 和 衣裳を源氏
も大笑しよ今今かゆうしと
なんしまいそもうてとうかう
らんとううかへらうまへわかる

てうらへまふ（細 詞源の御答らく八つかはうへきこらし）ぶらしおしりばらかしうれ
わされおりしらぐらうしれらうの中は衣装やさ
めつしもまづ何からんきつれなりかんま
いり俸らつれど（細 よやうるとかうさきこし）妙りひまへのでしうてと
どうと妙詞くて見えうつしさせ侍らん
（源 和 教章之）わやさうしくふわうらめしいうつかうもさ
てぞ激ぞふうあうらすう（和 そもそて源の詞）えそて六まへ去げ
めねとゆおしまつうれらり
（ま）わさつしき年ともいとれひうらのへうう
めうへの事さふやりうう、とうかうべきこと
しそわりんや
て激ぞふうらすうとらとふうかう今の波かで徒多うら心ならゆ
源氏の詞は其の心徳儀の御心も人と交わしてくりうう白

国立公文書館
National Archives of Japan